秋田県文化財調査報告書第332集

鹿来館跡

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI－

2002・3

秋田県教育委員会

鹿来館跡（ろくらいだてあと）

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI－

２００２・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,500箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した香り高い文化を育んでいくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和をはかりながら、埋蔵文化財を保護し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成11年度に飯田川町で実施した鹿来館跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この調査では、平安時代の竪穴住居跡や中世城館に伴う空堀・帯曲輪が発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、飯田川町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成 14 年 3 月

秋田県教育委員会
教育長　小野寺　清

例　言

1．本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、1998(平成11)年度に調査された秋田県南秋田郡飯田川町に所在する鹿来館跡の調査結果を収めたもので、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては11冊目に当たる。

3．調査の内容については、すでにその一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．遺物の検討および自然科学的分析は下記の個人・機関に依頼した。

陶磁器……仲野泰裕(愛知県陶磁資料館)

ガラス瓶……アサヒ飲料株式会社秋田支店

炭化物年代測定および樹種同定……パレオ・ラボ株式会社

5．本書に掲載した遺構図は、パスコ株式会社に委託したトータルステーション測量および写真測量による平面図と、担当調査員が現場で実測したセクション図をデジタルデータに変換したものを合成した。遺構図の合成およびトレースはパスコ株式会社に委託した。

6．本書に使用した地形図は、国土地理院発行25,000分の１地形図『大久保』・50,000分の１地形図『五城目』と日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供の1,000分の１工事用図面である。

7．本報告書を作成するにあたり、以下の方々からご指導・ご助言を賜わった。記して感謝申し上げます。(五十音順)

穴澤義功　工藤清泰　三宅徹也　門間裕一

8．本書の草稿執筆は、第２章第２節・第４章第１節の２出土遺物・第４章第２節の１を播摩芳紀、その他を渡邊慎一が行い、加筆・編集を渡邊慎一、高橋忠彦が行った。

凡　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＩ……竪穴住居跡　ＳＡ……柱穴列　ＳＢ……掘立柱建物跡　ＳＫ……土坑

ＳＤ……溝跡、空堀　ＳＭ……帯曲輪　ＳＸ……性格不明遺構

なお「帯曲輪」という遺構名については下記の参考文献に基づいて使用した。

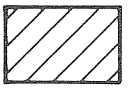
鳥羽正雄『日本城郭辞典』東京堂出版　1971(昭和46)年

2．遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(1998年版)によった。

3．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に算用数字を遺構土層に使用した。

4．遺構実測図で使用したスクリーントーンは下記のとおりである。

焼　土


地　山

目　次

序
例言・凡例　ii
目次　iii
表・挿図・図版目次　iv

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査要項 …… 1

第2章　遺跡の環境 …… 5
　第1節　遺跡の位置と立地 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 8

第3章　発掘調査の概要 …… 12
　第1節　遺跡の概観 …… 12
　第2節　調査の方法 …… 15
　第3節　調査の経過 …… 15

第4章　調査の記録 …… 17
　第1節　検出遺構と出土遺物 …… 17
　第2節　遺構外出土遺物 …… 36

第5章　自然科学分析 …… 44
　第1節　放射性炭素年代測定 …… 44
　第2節　鹿来館跡検出炭化材の樹種同定 …… 45

第6章　まとめ …… 48

報告書抄録
あとがき

挿　図　目　次

第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡 …… 2
第２図　遺跡調査区の範囲 …… 3
第３図　遺跡位置図 …… 5
第４図　遺跡周辺の地形分類図 …… 6
第５図　遺跡周辺の表層地質図 …… 7
第６図　鹿来館跡と周辺遺跡位置図 …… 9
第７図　鹿来館跡の範囲と現況図 …… 13
第８図　基本層序 …… 14
第９図　グリット配置図 …… 14
第10図　ＳＩ２３４竪穴住居跡 …… 18
第11図　ＳＩ２３４竪穴住居跡と出土遺物 …… 19
第12図　ＳＡ63柱穴列、ＳＢ60掘立柱建物跡 …… 21
第13図　ＳＡ294柱穴列、ＳＢ121掘立柱建物跡と出土遺物 …… 22
第14図　ＳＫ57出土ガラス瓶 …… 25
第15図　ＳＫＰ38・52・56柱穴様ピット ＳＫ09・10・55・57・62土坑 …… 26
第16図　ＳＫ90・93・96・104・138・202・221・222 223・236土坑 …… 29
第17図　ＳＫ224・225・288・289・290・291土坑 ＳＮ153・154焼土遺構 …… 30
第18図　ＳＤ11・12・118溝跡 …… 32
第19図　ＳＭ01帯曲輪 …… 33
第20図　ＳＤ61空堀 …… 35
第21図　遺構外出土遺物（１）石器 …… 37
第22図　遺構外出土遺物（２）陶磁器 …… 39
第23図　遺構外出土遺物（３）陶磁器 …… 40
第24図　遺構外出土遺物（４）陶磁器 …… 41
第25図　遺構外出土遺物（５）土器 …… 42
第26図　遺構外出土遺物（６）陶錘 硯・鉄製品 …… 43

付図１　鹿来館跡遺構配置図
付図２　鹿来館跡地形図

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 10・11
第２表　ＳＩ２３４竪穴住居跡内ピット属性表 …… 18
第３表　柱穴列・掘立柱建物跡ピット属性表 …… 23
第４表　柱穴様ピット一覧表 …… 24
第５表　陶磁器一覧表 …… 38
第６表　放射性炭素年代測定結果 …… 44
第７表　補正暦年代値 …… 45
第８表　鹿来館跡検出炭化材の樹種 …… 47

図　版　目　次

図版１-１　空中写真（南→北）
１-２　空中写真（西→東）
図版２-１　ＳＩ234確認面（西→東）
２-２　ＳＩ234（真上→）
２-３　ＳＢ121（真上→）
２-４　ＳＫＰ56（南→北）
２-５　ＳＫ09（東→西）
図版３-１　ＳＫ10（東→西）
３-２　ＳＫ55（北→南）
３-３　ＳＫ57（北西→南東）
３-４　ＳＫ62（北→南）
３-５　ＳＫ90（東→西）
３-６　ＳＫ93（東→西）
３-７　ＳＫ96（西→東）
３-８　ＳＫ104（西→東）
図版４-１　ＳＫ138（南→北）
４-２　ＳＫ222（東→西）
４-３　ＳＫ223（北→南）
４-４　ＳＫ224（東→西）
図版４-５　ＳＫ290（東→西）
４-６　ＳＫ291（西→東）
４-７　ＳＤ11・12（南→北）
４-８　ＳＤ118（西→東）
図版５-１　ＳＭ01・ＳＤ61・ＳＢ60（東→西）
５-２　ＳＤ61土層（１）（東→西）
５-３　ＳＤ61土層（２）（西→東）
５-４　ＳＤ61土層（３）（西→東）
５-５　ＳＤ61調査風景
図版６-１　ＳＭ01・ＳＤ61（北→南）
６-２　ＳＭ01土層（南東→北西）
図版７-１　遺構外出土遺物（１）陶磁器
７-２　同　上
図版８-１　遺構外出土遺物（２）陶磁器
８-２　同　上
８-３　遺構外出土遺物（３）陶錐・硯・鉄製品
図版９　鹿来館跡炭化材樹種同定（１）
図版10　鹿来館跡炭化材樹種同定（２）
図版11　鹿来館跡炭化材樹種同定（３）

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された総延長340kmの高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結して、小坂ＪＣＴで東北自動車道に接続する。1997(平成9)年2月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうちの秋田南Ｉ・Ｃ～昭和男鹿半島Ｉ・Ｃ間の25.7kmについては、同年11月13日に開通している。

鹿来館跡に係る昭和～琴丘間の20.7kmについては、1991(平成3)年12月に整備計画区間に、1993(平成5)年12月には実施計画認可を経て1994(平成6)年11月に路線が発表された。

これを受けて県教育庁文化課では、路線上の埋蔵文化財確認のため、1996(平成8)年9・12月に分布調査を実施し、その結果、鹿来館跡を含む周知の遺跡3ヶ所、新たに発見した遺跡16ヶ所の計19遺跡が工事区内に存在することが明らかとなった。

鹿来館跡については、中世城館として周知される館跡推定区域のうち、工事区域内の12,000㎡を対象範囲として、1999(平成11)年4・5月にかけて範囲確認調査を行い、中世～近世の城館跡で、それ以前には縄文時代に狩猟の場であったことがわかった。また、城館としての広がりは17,000㎡にも及ぶものと想定され、このうちの工事に係わる範囲は城館全体の東端に位置していることも判明した。

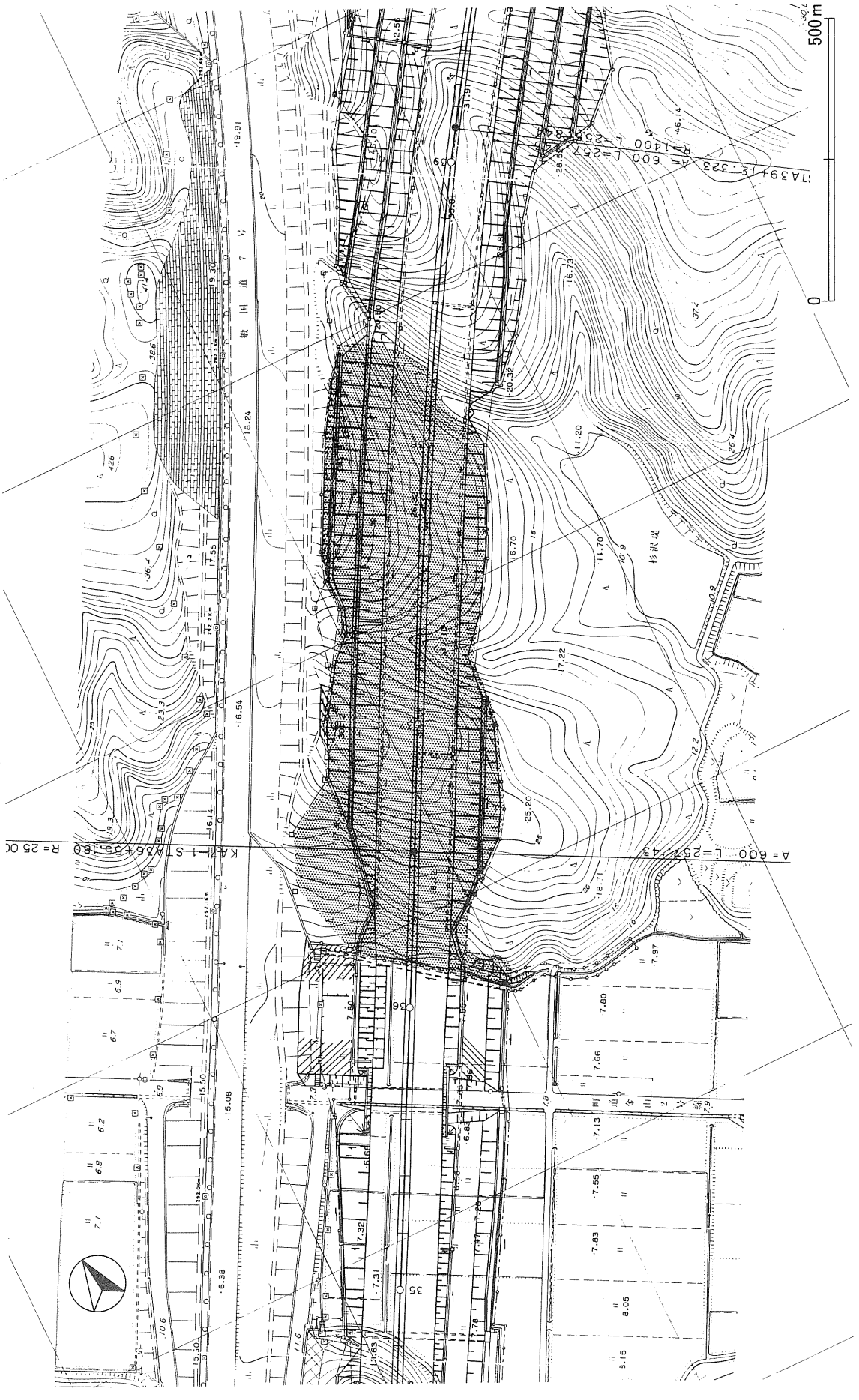
発掘調査は、表土除去前に航空写真撮影と地形測量による地形図の作成から着手し、この地形図から、城館の構造を読みとりながら調査を進めた。

鹿来館跡の調査が行われた平成11年には、昭和～琴丘間において同事業に伴って、大平遺跡(秋田市)、元木山根Ⅱ遺跡(昭和町)、毘沙門遺跡(昭和町)、西野遺跡(昭和町)、古開遺跡(飯田川町)、六ッ鹿沢遺跡(飯田川町)、中谷地遺跡(五城目町)、北遺跡(五城目町)、堂の下遺跡(琴丘町)、狐森遺跡(琴丘町)の10遺跡の調査を行い、調査総面積は66,740㎡であった。また、同自動車道の岩城～河辺間17.2kmにおいても、河辺町に所在する岱Ⅰ遺跡、岱Ⅱ遺跡、岱Ⅲ遺跡の調査を行っている。

第2節　調査要項

遺　跡　名	鹿来館跡(ろくらいだてあと)
遺跡略号	４ＲＲＤ
所　在　地	秋田県南秋田郡飯田川町和田妹川字鹿来20－１外
調査期間	平成11年4月26日～10月29日
事　業　名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る事前発掘調査
調査対象面積	12,000㎡

第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡



第２図　遺跡調査区の範囲

調査面積	12,000㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当	平成11年度
	渡邊　慎一(現 秋田県立矢島高等学校教諭)
	高平　信也(秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)
	伊東　美靖(秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)
	播摩　芳紀(秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)
	鎌田　　崇(秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)
	関　　友明(秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員)
総務担当	佐藤　　悟(秋田県埋蔵文化財センター総務課長)
	佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)
	成田　　誠(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)
	土橋　謙一(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)
	菅原　　晃(現 秋田県立横手工業高等学校事務長補佐)
	八文字　隆(現 中仙町立清水小学校主事)
調査協力機関	日本道路公団東北支社秋田工事事務所
	飯田川町教育委員会　井川町教育委員会

《参考文献》

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成9)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸⅨ－古野遺跡－』秋田県文化財調査報告書第253集　1995(平成7)年

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸ－蟹子沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第261集　1996(平成8)年

秋田県教育委員会『戸平川遺跡－東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅣ－』秋田県文化財調査報告書第294集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調報告書第296集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会『岱Ⅰ遺跡・岱Ⅱ遺跡・岱Ⅲ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』秋田県文化財調査報告書第316集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『古開Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』秋田県文化財調査報告書第317集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001(平成13)年

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

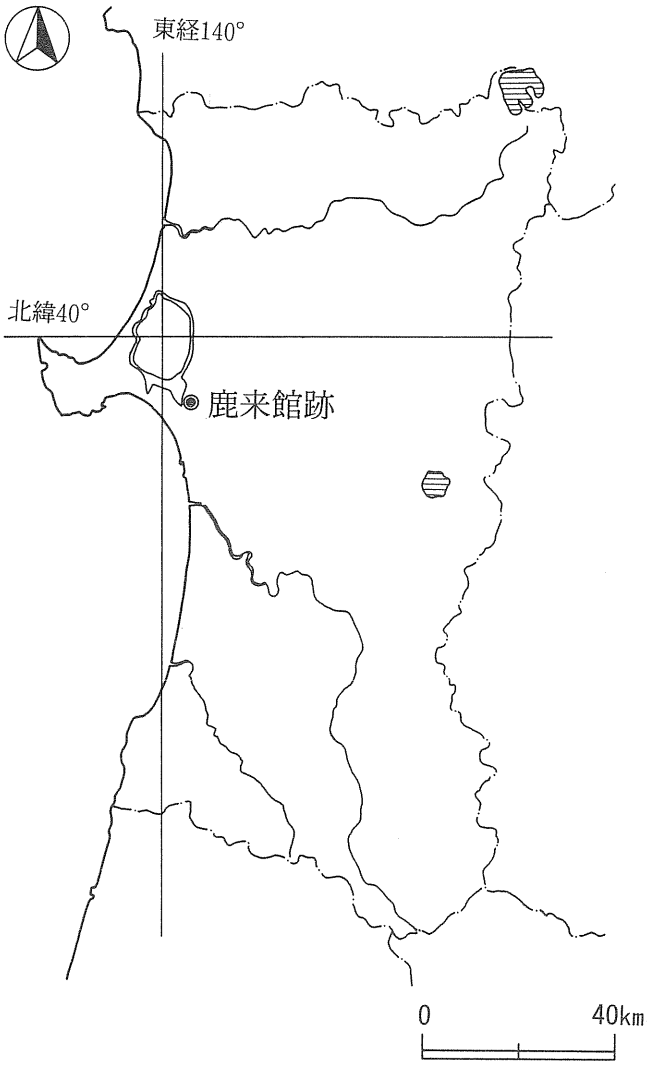
鹿来館跡の所在する秋田県南秋田郡飯田川町は、八郎潟残存湖の南東部、出羽丘陵西端部にある。出羽丘陵西部から八郎潟残存湖へは様々な小河川が西流しており、各水系により浸食を受けた丘陵地、河岸段丘が発達している。飯田川町は妹川流域と豊川下流域に位置する。妹川水系の流域面積は、約5.8k㎡と狭く水量が少ないため、農業用水路として河川改修され、和田妹川地区と金山地区の間には大堤が構築されている。

本遺跡は八郎潟残存湖岸から約3.5km東、JR奥羽本線羽後飯塚駅から南東へ1.8kmにあり、北緯39°53′06″、東経140°5′19″に位置する。館跡の中央部を国道７号が東西に分断しており、調査区は国道の東側である。

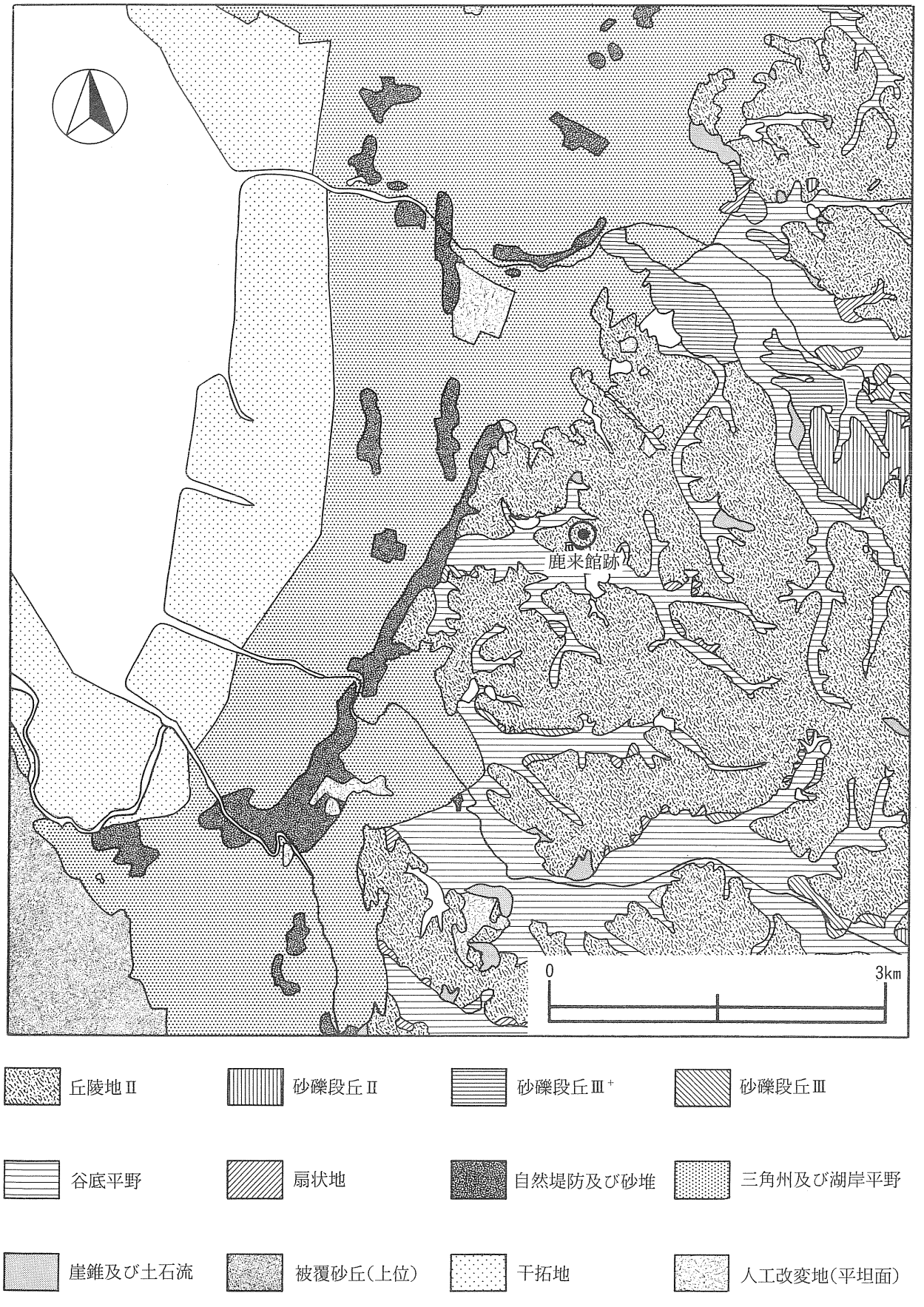
遺跡周辺の地形は出羽丘陵西部から八郎潟残存湖に向けて山地、丘陵地、段丘、低地に分けられる。『土地分類基本調査　五城目』によると、俎山(721.8m)を中心とする山地では俎山山地が広がり、その側辺では大麦丘陵、井川丘陵、豊川丘陵がみられる。井川、妹川、豊川流域では河岸段丘が一部発達し、それぞれ谷底平野が形成される。丘陵地と残存湖岸の間には湖東沖積低地が形成されている。

地質は、下位から新第三紀中新世の女川層、船川層、天徳寺層、鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の潟西層、段丘堆積物、完新世の段丘堆積物、沖積低地堆積物から構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出している。このため沖積低地に接する丘陵地の一部では、船川層の泥岩、女川層の珪質頁岩がみられる。

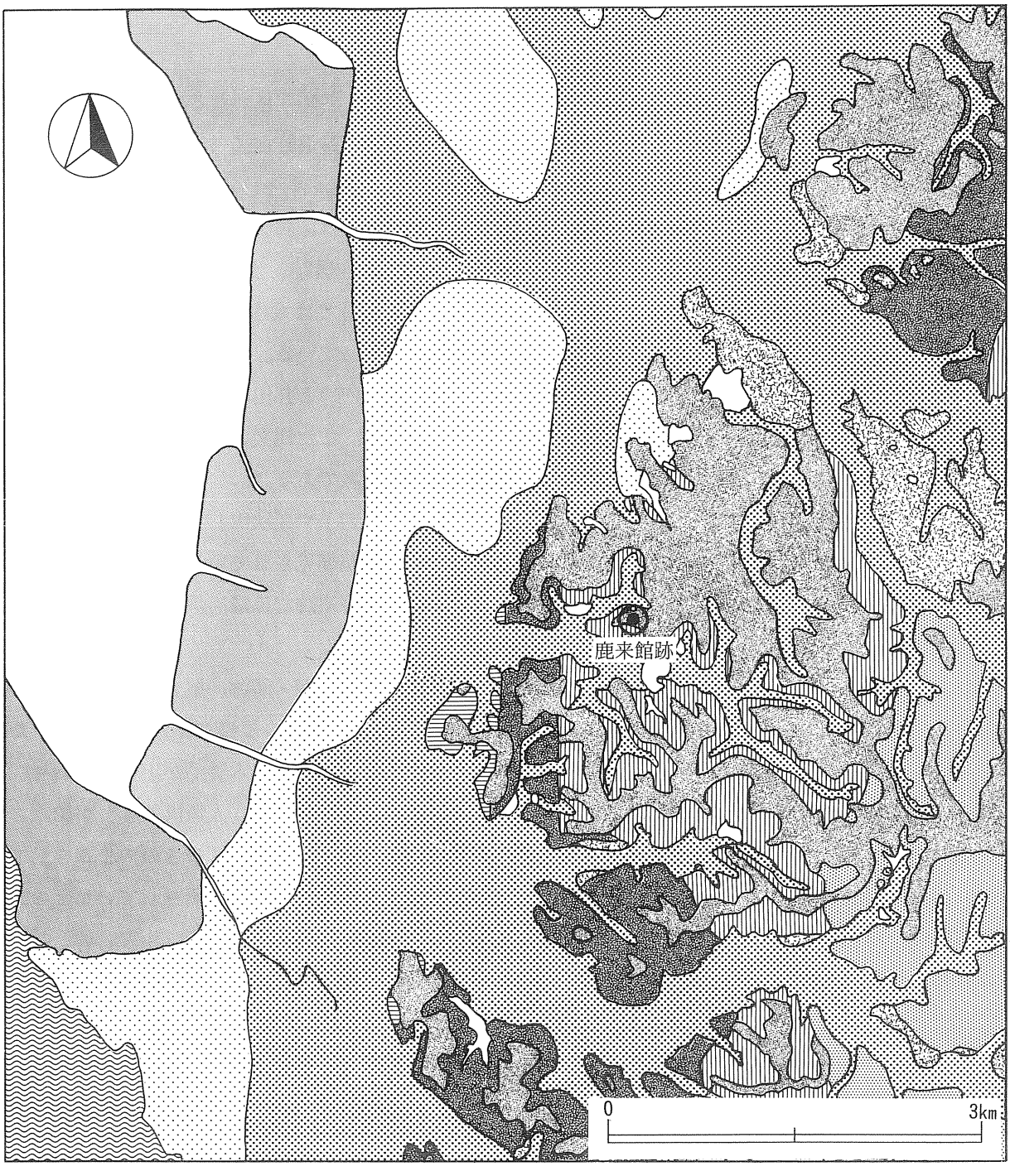
鹿来館跡は、妹川水系により侵食を受ける井川丘陵に立地しており、地質は新第三紀中新世に形成されたシルト岩質の天徳寺層となっている。遺跡の標高は9～41mである。



第３図　遺跡の位置



第４図　遺跡周辺の地形分類図



泥、砂及び礫（湖底堆積物）
砂がち堆積物2（砂丘砂）
砂がち堆積物3（沖積低地堆積物）
泥がち堆積物（沖積低地堆積物）
砂及び礫（段丘堆積物）
砂礫層（潟西層）
泥岩（笹岡層）
シルト岩（天徳寺層）
泥岩（船川層）
珪質頁岩（女川層）

第５図　遺跡周辺の表層地質図

第２節　歴史的環境

八郎潟残存湖東岸の沖積低地及び出羽丘陵西縁部の丘陵地には、各時代にわたる様々な遺跡が立地している。これらの遺跡について、秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（中央版）』『秋田県の中世城館』『遺跡詳細分布調査報告書』に基づいて概観する。

縄文時代の遺跡は、大野地遺跡(32)の集落跡がある。大野地遺跡は標高40ｍの丘陵地上の遺跡で、円筒下層ａ・ｂ式など縄文時代前期の土器を中心に出土しており、住居跡、土坑、炉、ピットなどの遺構とともに、大量の貝殻が出土している。また、野畑Ａ遺跡(29)では大木８ａ・８ｂ・９式、後山遺跡(78)では円筒上層ａ・ｂ式など、縄文時代中期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、新間Ａ遺跡(5)、新間Ｂ遺跡(6)、越雄遺跡(７)と井川町新間地区の台地に集中して確認されている。越雄遺跡では遠賀川系土器が出土している。また縄文・弥生時代の遺物に付着するアスファルトの産地として、昭和町槻木地区の豊川油田が有名である。

古代の遺跡では、羽白目遺跡(70)から土師器、須恵器のほか、刀子や「秋田」と刻銘された瓦が出土している。また、飛塚Ⅰ遺跡(21)、下村遺跡(19)では墨書土器が発見されている。元木山根Ⅱ遺跡(80)、西野遺跡(52)、後山遺跡では住居跡が検出されており、西野遺跡では鍛冶炉が検出され、炉に伴う羽口が出土している。

中世の遺跡は、集落跡として洲崎遺跡(13)が井川河口に位置する。堀・溝跡、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出されており、調査区東端で検出された堀は方二町(約220m)の規模で遺跡を巡っていたと推察されている。遺物は古瀬戸、青磁、珠洲などの陶磁器のほか、大量の木製品が出土しており、井戸側を構築していた木材からは、僧形の人物の足元に人魚が墨書きされた「人魚供養札」が確認されている。また、江戸時代後期の紀行家である菅江真澄(1754～1829年)の日記『のきのやまぶき』では、現在、飯田川町下虻川に所在する東伝寺が、江戸後期以前に洲崎遺跡周辺に所在していたとの記録が残されている。中世城館としては井川流域に坂本湊城(20)が丘陵地上に立地し、空堀、郭、井戸跡が発見され、土師器、須恵器、刀子、青磁、古瀬戸などが見つかっている。その他に館岡館（28）も確認されている。妹川流域では、鬼王館(42)、鷲尾館(41)、築掛館(40)、小玉館(39)が妹川を挟んで位置する。鬼王館では空堀、郭が確認されており、唐津系陶器片が採集されている。豊川流域には山田館(53)、極楽館(60)、羽白目館(70)、岡井戸館(58)、船橋館(71)、オオサカ館(74)、元木館(81)、松館(88)、槐館(94)、岩瀬館(97)が立地する。板碑は、秋田県では八郎潟周辺に多く、板碑の石質は五城目町の森山に産する角閃安山岩の自然石が殆どであり、特に井川町今戸・浜井川地区に密集する。本遺跡周辺では、北東に飯塚神明社観音堂板碑が４基確認されている。４基はいずれも貞和３(1347)年の紀年銘があり、関連性が考えられる。

《参考文献》

秋田県『土地分類基本調査　五城目』1973(昭和48)年

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』1990(平成２)年

秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県埋蔵文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

秋田県教育委員会『洲崎遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第303集　2000(平成12)年

第６図　鹿来館跡(42)と周辺遺跡位置図

第１表－１　周辺遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	種別	遺構、出土遺物等
1	実相院板碑	板碑	
2	熊野神社板碑	板碑	
3	寺の内	遺物包含地	古銭(開元通宝、活平通宝ほか)
4	賢蔵院板碑	板碑	
5	新間Ａ	遺物包含地	縄文土器(晩期)、弥生土器ほか
6	新間Ｂ	遺物包含地	縄文土器(晩期)、弥生土器ほか
7	越雄	集落跡	竪穴住居跡、土器棺墓、弥生土器
8	小泉	遺物包含地	土師器片、須恵器片、丸玉
9	乗江院宝篋印塔	宝篋印塔	基礎、塔身、笠
10	小今戸板碑Ⅰ	板碑	
11	小今戸板碑Ⅱ	板碑	
12	小今戸板碑Ⅲ	板碑	
13	洲崎	集落跡	堀、井戸跡、溝跡、掘立柱建物跡、木製品、陶磁器
14	新屋敷板碑	板碑	
15	新屋敷五輪塔	五輪塔	五輪塔(地・水・火輪)
16	資料館前板碑	板碑	
17	田中神明社板碑	板碑	
18	羽立伊勢堂板碑	板碑	
19	下村	遺物包含地	墨書須恵器
20	坂本湊城	館跡	空堀、土塁、井戸跡、須恵器、刀子、黄瀬戸片、木椀
21	飛塚Ⅰ	遺物包含地	墨書土師器、土師器片、須恵器片
22	飛塚Ⅱ	窯跡	鉢、壺破片、擂鉢破片等
23	縄手内	遺物包含地	土器片
24	八幡古堂	遺物包含地	
25	八幡神社板碑	板碑	
26	築館	館跡	空堀、土塁
27	羽根田	火葬墓	土師器壺(骨壺)、人骨
28	館岡館	館跡	腰郭、帯郭、空堀
29	野畑	遺物包含地	縄文土器片、石鏃、石匙、石槍、石斧、石錘、石皿
30	南台	遺物包含地	骨臓器(土師器、須恵器)
31	比丘尼館Ⅰ	館跡	
32	大野地	遺物包含地	土坑、縄文土器(中期)、円筒下層式、石器、獣骨
33	鳥木沢	遺物包含地	縄文土器(後期、晩期)
34	古開Ⅰ	遺物包含地	陶器片
35	古開Ⅱ	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器、土師器
36	古開	遺物包含地	須恵器杯
37	飯塚神明社観音堂	建築	入母屋向拝唐破風造柿葺一間社、板碑
38	観音寺	寺院跡	礎石、板碑(貞和三年紀年銘)
39	小玉館	館跡	帯郭
40	築掛館	館跡	帯郭、空堀、板碑(南北朝紀年)
41	鷲尾館	館跡	帯郭、空堀、縄文土器(後期、晩期)、石鏃
42	鹿来館	館跡	帯曲輪、空堀、竪穴住居跡、土師器、陶磁器
43	鬼王館	館跡	帯郭、空堀、鉄滓、陶磁器、石鏃、縄文土器(後期、晩期)
44	六ッ鹿沢	館跡	帯曲輪、陶磁器
45	松葉沢	遺物包含地	縄文土器(中期、晩期)
46	城の内	建物跡	碑
47	湯の沢Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片(前期)、須恵器片
48	湯の沢Ⅱ	遺物包含地	土師器片
49	八幡台	寺院跡	五輪塔風空輪部

第１表－２　周辺遺跡一覧(2)

番号	遺跡名	種別	遺構、出土遺物等
50	石川理紀之助遺跡	史跡	尚庵、書庫、郷倉
51	下台	遺物包含地	
52	西野	集落跡	竪穴住居跡、鍛冶炉、土師器、須恵器、鉄滓
53	山田館	館跡	焼米、茶臼受け皿片
54	深田沢Ⅱ		土師器、須恵器
55	深田沢	遺物包含地	須恵器片
56	毘沙門	集落跡	須恵器、陶磁器
57	アケビ沢台	遺物包含地	縄文土器片(晩期)、土師器片
58	岡井戸館	館跡	帯郭数段
59	千刈田	遺物包含地	石鏃、須恵器片
60	極楽館	館跡	主郭、帯郭、空堀等
61	塩辛田	遺物包含地	石刀
62	塔田Ⅰ	遺物包含地	土師器、須恵器片
63	塔田Ⅱ	遺物包含地	須恵器、土師器片
64	塔田Ⅲ	遺物包含地	須恵器片
65	塔田Ⅳ	遺物包含地	土師器片、須恵器片
66	苗代沢	遺物包含地	縄文土器片(晩期)、土師器、須恵器片
67	槻木盛土墳	火葬墓	須恵器片、壺、葺石
68	大宮	遺物包含地	須恵器壺
69	船橋経塚	経塚	盛塚
70	羽白目	望烽	烽舎跡、柵跡、平窯跡、瓦、刀子、土師器、須恵器、鉄器
71	船橋館	館跡	焼米
72	正戸尻Ⅰ	遺物包含地	須恵器片
73	正戸尻Ⅱ	遺物包含地	土師器、須恵器片
74	オオサカ館	館跡	
75	鳥巻Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片(前期、後期)、須恵器片
76	鳥巻Ⅱ	遺物包含地	縄文土器片(中期、後期)、鉢、アスファルト付着鉢型土器
77	蘭戸下	遺物包含地	獣骨
78	後山	集落跡	竪穴住居跡、溝跡、土器埋設遺構、縄文土器(中期)、土師器、須恵器
79	元木山根Ⅰ	遺物包含地	フレイク
80	元木山根Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器
81	元木館	館跡	
82	元木山Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土師器、須恵器片
83	元木山Ⅱ	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土師器、須恵器片
84	下畑	遺物包含地	須恵器片
85	町後碑	板碑	
86	寸白沢	遺物包含地	須恵器片
87	高野	遺物包含地	須恵器片
88	松館	館跡	帯郭
89	大崎道添	遺物包含地	土師器片
90	狐森	遺物包含地	縄文土器(後期、晩期) ほか
91	七ッ森	遺物包含地	縄文土器(後期)、貝ほか
92	草生土沢Ⅲ	遺物包含地	五輪塔頂部、近くに糠塚
93	草生土沢Ⅱ	遺物包含地	石匙
94	槐館	館跡	本郭、腰郭、空堀
95	真形尻	遺物包含地	縄文土器片(中期)、鹿・鳥類骨
96	上松館	遺物包含地	縄文土器
97	岩瀬館	館跡	
98	前山Ⅰ	遺物包含地	須恵器

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

鹿来館跡は、飯田川町のほぼ中央に位置し、妹川水系によって侵食された丘陵地に、自然地形を利用して構築された山城の中世城館である。『秋田県の中世城館』では次のように説明されている。「井川丘陵の西端、鞍部に立地する複郭形態の城館である。本郭部はＳ字状をなすが、国道7号線昭和飯田川バイパスの開通により長さ150ｍ、幅50ｍにわたって切断されている。現存する郭Ｉは西に残され、放射状に広がる斜面を等高線状に10数段の帯郭が巻き、頂部近くに腰郭を伴う。北西麓の帯郭を縦断する堀状の通路は当初のものかどうか。旧地形図を読めばバイパス中央部分に空堀の存在が推定される。郭Ⅱは23ｍ×70ｍ、現状横瓶形を呈し、郭Ｉとの間に空堀を切って南東にのびるものの如くであるが明言し難い。南縁斜面に３群４～６段の帯郭を伴うが、北は1段。北150ｍに郭Ⅲを配し南東鞍部に郭Ⅳ～Ⅷをのせる。Ⅳ～Ⅵの北東斜面は幅2～5ｍ、7～8段の整然たる帯郭を約200ｍにわたって造出し、１～２本の竪堀がこれを切る。Ⅴの南端に小空堀が2本、小郭Ⅶ、Ⅷの東にやや不規則な６～７段の帯郭がある。郭Ⅸは空堀によって分離されるものと判断される。東250ｍに佐藤治部の屋敷跡があり鉄滓が出土する。」

『秋田県の中世城館』での鹿来館の範囲は、東西約380ｍ、南北約450ｍの233,000㎡に広がる。上記にある館跡中央部に位置する郭Ⅲは、今回の事業に関わる工事区域内であったが、県教育庁文化課による分布調査の結果、県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査は不必要であるとし、範囲確認調査を行う前に道路建設工事が進められていた。

調査区域は、館跡を東西に分断する国道７号の東側南縁部に該当し、調査面積は12,000㎡である。調査区北側と中央を東西の方向に侵食する沢は東側に沼地を形成する。本調査では、調査区中央を開析する沢地の北側をＡ区、南側をＢ区とし調査を実施した。調査区の現況は杉林となっており、大部分が南東に向かって次第に高度を減ずる斜面であるが、Ａ区、Ｂ区にそれぞれ段状の平坦面が見られる。Ａ区に確認した４段の平坦面は、人工的な段状の遺構、帯曲輪である。Ｂ区に認められる段状の平坦面は、『秋田県の中世城館』において横瓶形を呈する郭Ⅱおよび４～６段の帯郭としているが、土層観察では人為的影響がみられず、妹川の側方侵食によって形成された自然地形と判断した。

調査区の基本層序は範囲確認調査時のトレンチを利用し、Ｂ区平坦部であるＭＤ44グリットで観察した。層位は以下の通りである。

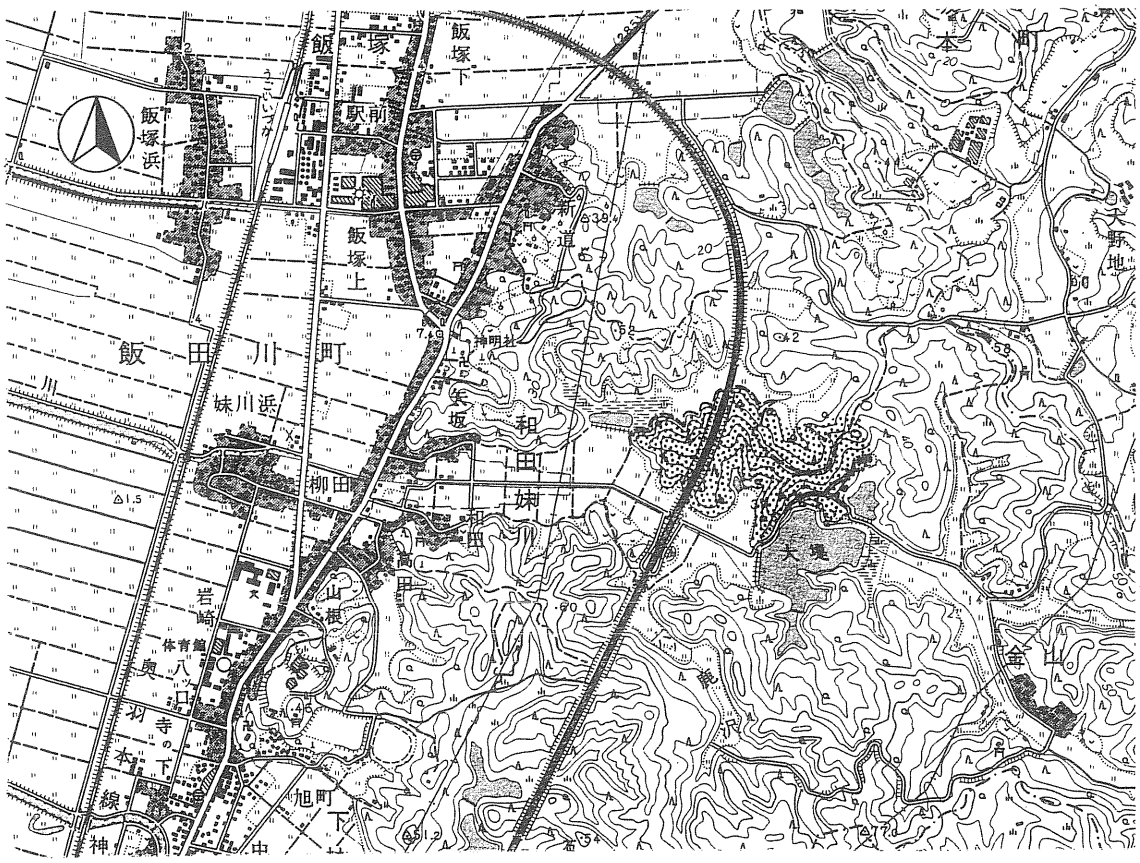
Ｉ層：暗褐色土(10ＹＲ３／３)　ややしまりの弱いシルト質の表土。

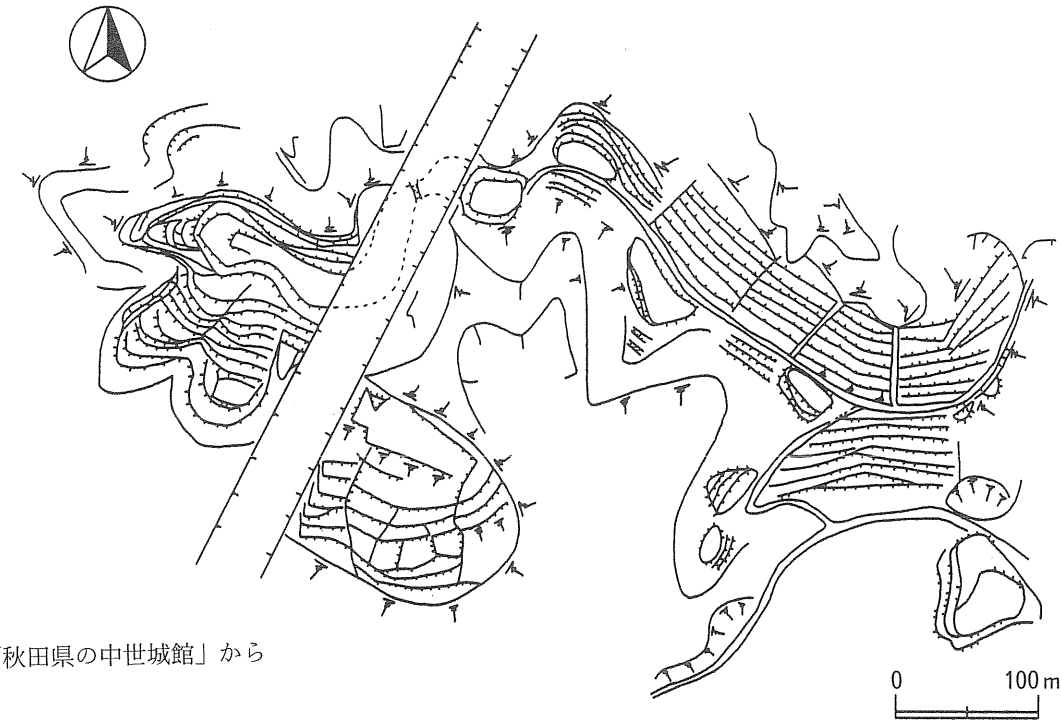
Ⅱ層：黒色土(10ＹＲ２／１)　ややしまりの弱いシルト質土。

Ⅲ層：暗褐色土(10ＹＲ３／３)　しまりのあるシルト質土。

Ⅳ層：褐色土(10ＹＲ４／４)～黄褐色土(10ＹＲ５／６)　しまりのあるシルト質の地山土。Ｂ区では粘土質ブロックが含まれる。

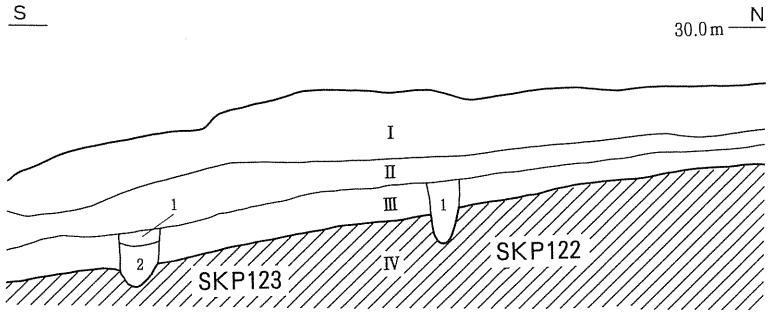
調査区斜面部分においては杉林伐採等の重機による撹乱が見られ、第Ⅱ～Ⅲ層を欠く部分が多く占める。帯曲輪以外の遺構確認面は第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面である。





「秋田県の中世城館」から

第７図　「鹿来館」の範囲と現況図

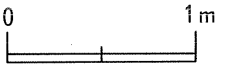


基本層序

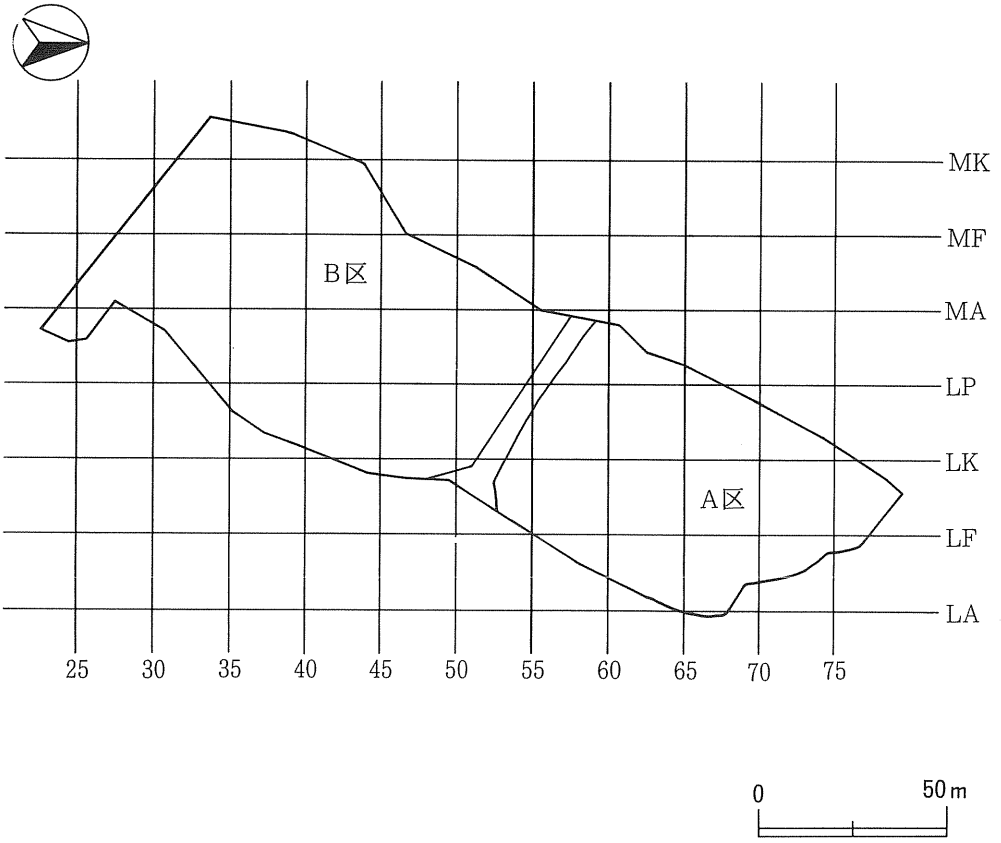
Ⅰ.暗褐色土(10YR3／3)ややしまりの弱いシルト質の表土。
Ⅱ.黒褐色土(10YR2／1)ややしまりの弱いシルト質土。
Ⅲ.暗褐色土(10YR3／3)しまりのあるシルト質土。
Ⅳ.褐色土(10YR4／4)～黄褐色土(10YR5／6)しまりのあるシルト質の地山土。
　B区では粘土質ブロックが含まれる。

SKP122
1.黒褐色土(10YR2／2)

SKP123
1.黒褐色土(10YR3／2)
2.にぶい黄褐色土(10YR4／3)



第８図　基本層序



第９図　グリッド配置図

第２節　調査の方法

調査区は起伏が激しく、調査区南側の平坦面に原点(ＭＡ50)を設定した。原点(ＭＡ50)は国家座標を用い、Ｘ－12428・Ｙ－63308の位置とした。この原点から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。この方形グリッドの南東端には、東から西に向かって東西方向を示す…ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ…というアルファベットと、南から北にむかって南北方向を示す…48・49・50・51…の2桁の数字を組み合わせた記号を標記し、グリッドの名称とした。

検出された遺構は、トータルステーションでその位置を測定した。遺構の精査は２分法を用い内部に堆積する覆土の状態を観察し、土層図作成後、平面実測図を完成させるという手順をとった。遺構番号は、01から通し番号で付した。遺構の確認は地山面で行った。

遺物は、遺跡名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入した袋に入れ取り上げた。遺物番号を付したものは、トータルステーションで、出土地点及び出土レベルを測定した。

調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は基本的に1／20の縮尺で作図した。空堀、帯曲輪、掘立柱建物跡は、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施し、1／20の縮尺で平面図を作成した。検出遺構の写真撮影は、35mm判モノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルムと6×4.5判モノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルムを併用し、随時35mm判カラーネガフィルムとポラロイドカメラを使用した。

第３節　調査の経過

４月26日、公団提供の重機により設定トレンチの表土除去を開始した。５月７日にトレンチの表土除去を終了し、調査対象面積の約10％にあたる16本のトレンチを設定した。中世城館に伴う大規模な遺構を確認し、中央にある空堀と考えられていた沢は、深堀の結果、人工的には手が加えられていないことがわかった。なお、斜面上のトレンチでは柱穴群や黒色土の落ち込みを確認した。条件整備については、駐車場・プレハブ用地・進入路の造成・階段の施設が終了した。飯田川町において、三浦隆一所長出席の上、作業員説明会を実施した。５月12日には井川町で作業員説明会を行った。

５月17日から作業員を雇用し、重機で表土除去を終了したトレンチ内の精査を開始した。精査は北側のトレンチから行った。５月21日計測業務委託の現地説明会を行った。５月31日、調査対象範囲内に散乱する枝葉の除去を行った。６月２日に株式会社パスコによる航空写真撮影が行われた。３日、重機による表土除去および排土置場の設置等について、日本道路公団と協議した。

６月７日から、重機による表土除去に伴う排土運搬路を設置するため、排土運搬路区域の表土除去・遺構精査を開始した。11日、作業員・非常勤職員の健康診断を実施した。６月14日、排土運搬路区域にＳＫ(土坑)、ＳＫＰ(柱穴様ピット)、ＳＤ(空堀・溝跡)、ＳＭ(帯曲輪)を確認した。また、等高線実測を平板で行った。６月17日、飯田川町教育委員会の７名が来跡した。６月21日にベルトコンベアー、機材等が搬入された。

７月１日から調査区北側(Ａ区)において、重機による表土除去作業を開始した。重機によるＡ区表

土除去の間、作業員により調査区南側（Ｂ区）の平場・北側沢部分の表土除去・ジョレンがけを行った。７月７日に飯田川町文化財審議委員会と羽城中学校教諭の６名が来跡した。７月11日から７月13日までの間で株式会社パスコによるグリッド杭打設作業が行われ、Ａ区のジョレンがけ、遺構精査を行った。Ａ区北端に位置するＳＭ01（帯曲輪）、ＳＤ61（空堀）の南側に１間×４間のＳＢ60（掘立柱建物跡）が１棟確認された。ＳＭ01は、遺構中央部の土層断面図作成とそのベルトの撤去、ＳＤ61は掘り下げを行った。重機によるＡ区表土除去終了後、Ｂ区表土除去、排土運搬路・排土置場作成を開始した。７月26日、ＳＭ01はベルト・切株の撤去と写真撮影、ＳＤ61は断面図の作成を行った。ＳＭ01の西側は国道７号によって切られているが、さらに１～２段あった可能性があると推察した。また、東京大学学生土屋里織さんが調査に参加した。８月５日から株式会社パスコによるＡ区の計測業務が開始された。８月９日からラジコンヘリによるＡ区写真撮影のためのジョレンがけと株式会社パスコによる計測業務を行った。10日にラジコンヘリによる写真撮影を実施し、Ａ区の調査を終了した。

８月19日からＢ区の遺構精査を開始し、Ｂ区南側斜面の基本土層図を範囲確認調査時のトレンチを利用し作成した。また、排土運搬路・排土置場が完成した。南側斜面の表土除去に関しては、切株が多く重機では不安定な急斜面であるため、スコップでの掘り下げにより行うこととした。８月30日、Ｂ区北側の平場区域からＳＫＰ、ＳＤを検出した。北側平場区域の一部からは近世陶磁器が集中して出土した。９月６日、ベルトコンベアーをＡ区からＢ区へ移動し設置した。南側斜面の表土除去はスコップでの手堀り作業により行うが、連日の雨により足元が不安定で危険であったため、作業を進めることができなかった。９月20日、株式会社パスコが来跡し、トータルステーションによる遺物出土位置の計測を行った。また、航空写真パネル、Ａ区平面図等の成果品を頂いた。９月27日、Ｂ区北部の平場からＳＢ121、Ｂ区南西部の平場からＳＩ234（竪穴住居跡）が検出された。ＳＢ121は、２間×２間で検出された。また、ＳＩ234は、約3.4×3.6ｍの略方形を呈しており、遺構内からは土師器片が出土した。10月５日、Ｂ区南側斜面に設置した排土運搬路を撤去し、８日から運搬路を撤去した区域のジョレンがけ、精査を行った。10月21日から株式会社パスコによる計測業務を行った。また、22日にＳＩ234の精査が終了した。遺構内から柱穴様ピット９基、土師器片34点を検出した。10月25日・26日に調査区全範囲のジョレンがけ、27日にラジコンヘリ写真撮影を実施した。28日・29日に現場撤収作業を行い、発掘調査を終了した。

《参考文献》

鳥羽正雄　『日本城郭辞典』　東京堂出版　1971（昭和46）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財報告書第86集　1981（昭和56）年

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と出土遺物

１　検出遺構の概要

調査により検出した遺構は、竪穴住居跡１軒、柱穴列２列、掘立柱建物跡２棟、柱穴様ピット126基、土坑21基、焼土遺構２基、溝跡・空堀４条、帯曲輪１基である。

各遺構の構築時期については、大部分が伴出遺物を欠くため明確ではない。このうち、土師器の出土した竪穴住居跡（ＳＩ234）は古代、中世城館としての機能を果たしていたと考えられる空堀（ＳＤ61）帯曲輪（ＳＭ01）とそれに隣接する掘立柱建物跡（ＳＢ60）は中世、鉄製の角釘の出土した掘立柱建物跡（ＳＢ121）とそれに付属すると考えられる柱穴列（ＳＡ234）は近世、ガラス瓶の出土した土坑（ＳＫ57）は近代に属する遺構として扱った。また、Ｂ区北部平坦面に検出したＳＸ282は、覆土および形態から現代の撹乱と判断した。

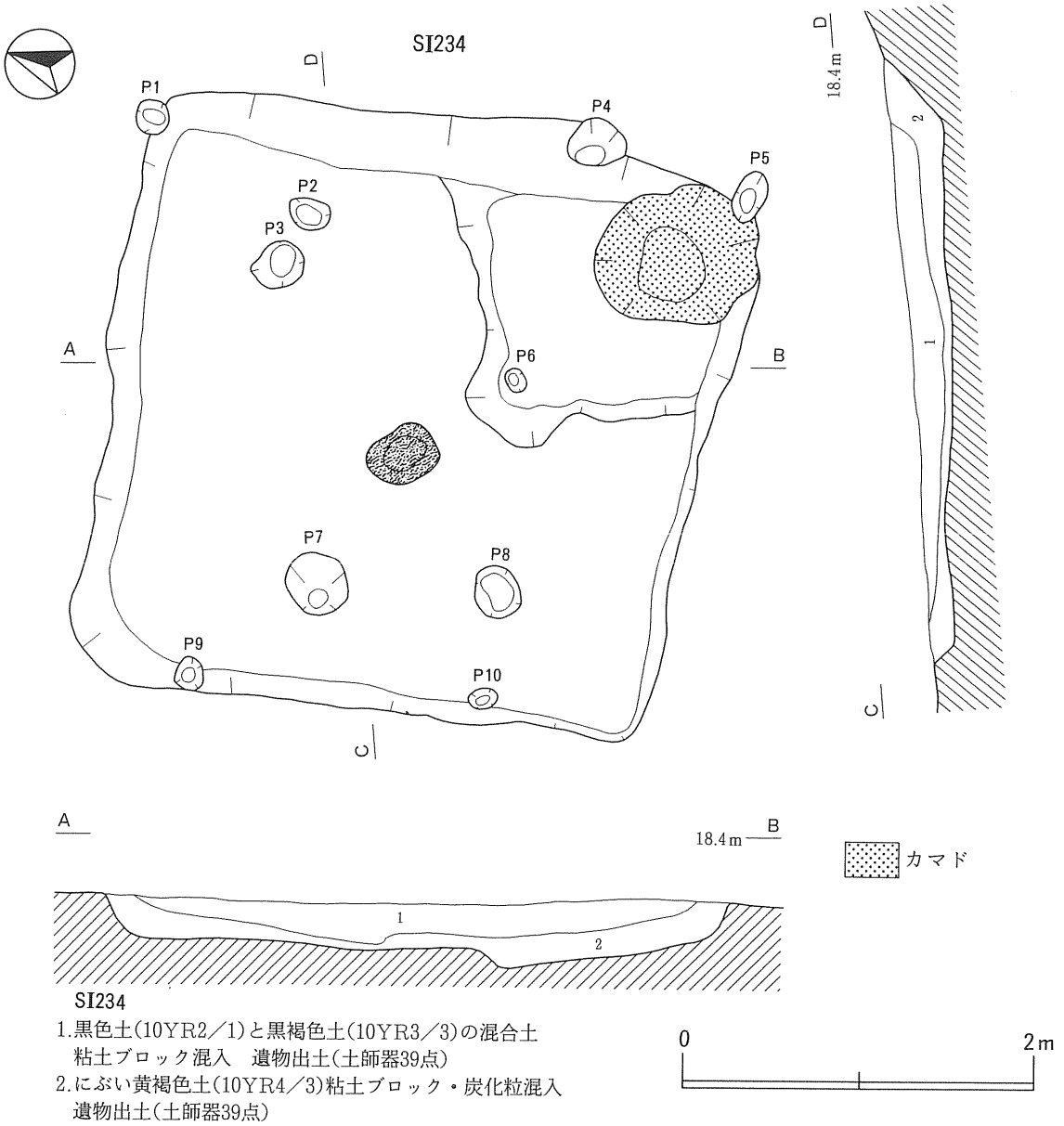
２　竪穴住居跡

ＳＩ234竪穴住居跡（第10・11図、図版２）

ＭＨ42・43、ＭＩ42・43区に位置する。黒色～黒褐色の落ち込みとして地山面で確認した。長軸（北－南）3.60m、短軸（東－西）3.40mで、ほぼ方形を呈する。埋土は２層に分けられる。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面はほぼ平坦で堅く締まり、中央部に焼土が認められた。中央付近の焼土は、長軸40cm×短軸32cm、厚さ4cmで、楕円形を呈する。東側隅部のカマドは、長軸94cm×短軸86cm、深さは最深部で29cmである。柱穴様ピットは竪穴床面に６基、周囲に４基を検出した。

遺物は焼土周辺の床面から土師器片が39点出土した。うち器形が明らかであるのは甕４個体、坏１個体である（第11図）。胎土は砂粒を多く含むものと、含まないものとに分けられる。２と５は同一個体の可能性がある。

１はロクロ整形の坏である。底径6.5cmで、底部切り離しは回転糸切りである。底端部が張出す。立ち上がりは底部付近からすぐに内反する部分と外湾する部分が認められる。２は甕の口縁部～体部の破片である。体部はわずかに膨らみを持ち、体部上半寄りの最大径から緩やかに内湾しながら頸部に至り、やや外傾して口縁で更に外側に屈曲する。胎土が粗く、表面にヘラケズリによって砂粒が動いた痕が観察できる。口縁部は摩滅が激しいが、平縁である。口縁部外面には、頸部の調整と、口唇部を屈曲させたときの二段の指頭圧痕が残る。３は底部に砂の付着が見られる砂底土師器である。体部下半にはヘラケズリによる調整が施され、底部は手捻りによる張出しを持つ。４は甕の口縁部である。体部からやや内傾し、口縁でやや強く外反する。５は２と同一個体の可能性を持つ甕の体部～底部である。底部からの立ち上がりは緩やかに内湾し膨らむ。縦方向のヘラケズリによる調整が全体に施されている。

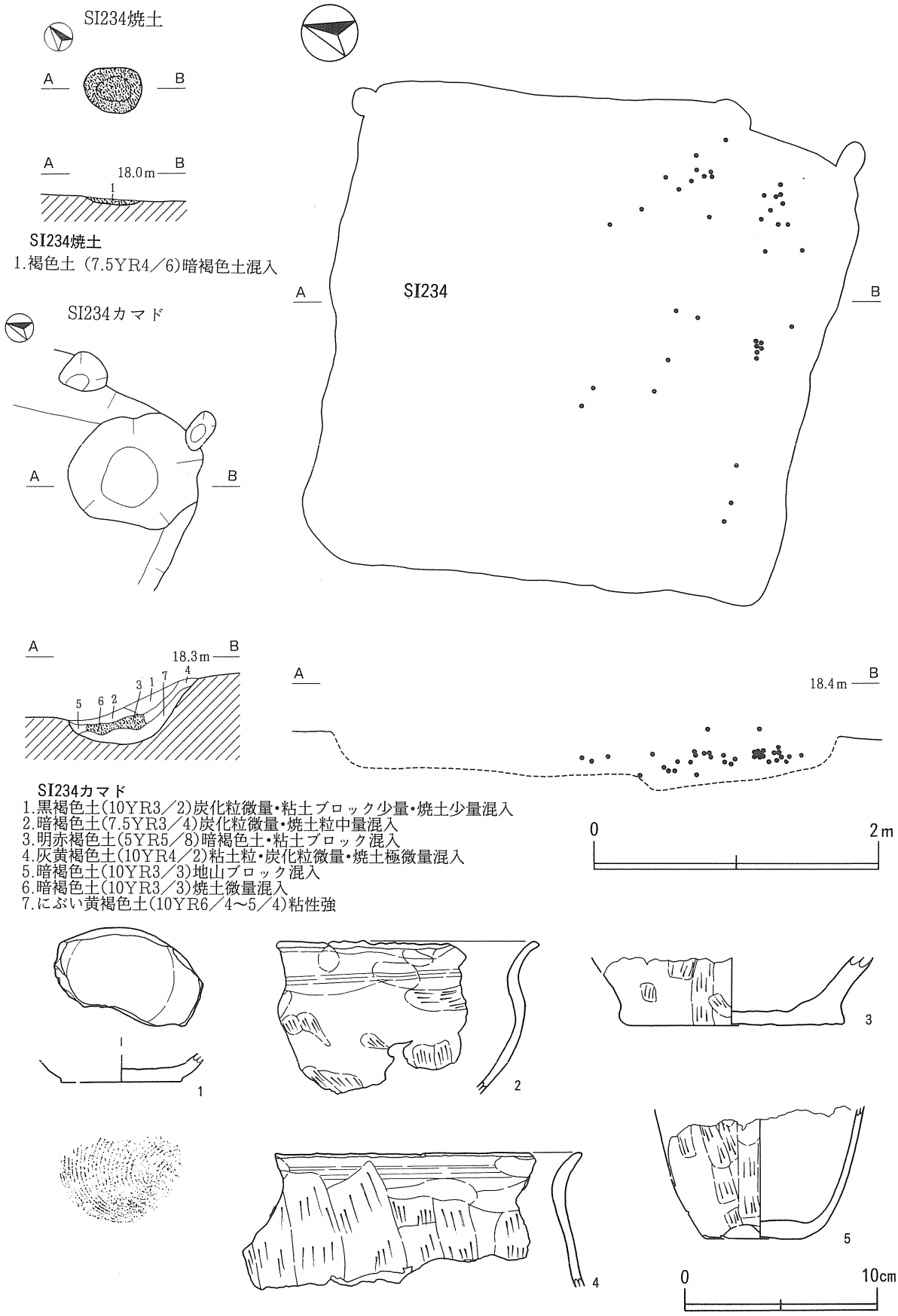


SI234
1.黒色土(10YR2／1)と黒褐色土(10YR3／3)の混合土
粘土ブロック混入　遺物出土(土師器39点)
2.にぶい黄褐色土(10YR4／3)粘土ブロック・炭化粒混入
遺物出土(土師器39点)

第10図　SI 234竪穴住居跡

第２表　SI 234ピット属性表

ピット番号	位　置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
P 1	MH42	円　形	20×20	13× 8	6	18.12
P 2	MH42	楕円形	25×18	15×10	12	17.73
P 3	MH42	不整円形	31×26	19×14	12	17.74
P 4	MH42	不整円形	34×27	17×12	12	18.01
P 5	MH42	楕円形	30×17	14× 8	7	17.93
P 6	MH42	楕円形	14×11	7× 5	10	17.69
P 7	MH42	略円形	37×34	11×10	17	17.69
P 8	MH42	略円形	30×26	22×14	15	17.66
P 9	MI42	略円形	20×16	9× 8	7	17.81
P10	MH42	楕円形	16×12	8× 4	16	17.73



第11図　SI 234竪穴住居跡と出土遺物

３　柱穴列

ＳＡ63柱穴列(第12図)

ＬＯ62・63、ＬＮ62～65区に位置する。調査区西側で確認されている。８基のピットからなる柱穴列。柱穴の直径は21cm～46cmを測る。平面形はほぼ円形。確認面からの深さは5～19cmである。遺物は出土していない。周辺には柱穴様ピット群が多くみられるが、国道に切られる区域に集中して存在する可能性がある。

ＳＡ294柱穴列(第13図)

ＭＢ44、ＭＣ45区に位置する。４基のピットからなる柱穴列。柱穴の直径は約26～28cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約24～26cm。Ｐ－11、12は底面に柱アタリのクボミが残り、断面で柱痕が確認された。遺物は出土していない。ＳＢ121掘立柱建物跡に隣接し、ＳＢ121に関連すると考えられる。

４　掘立柱建物跡

ＳＢ60掘立柱建物跡(第12図、図版５)

ＬＫ65～68、ＬＬ66～68区に位置する。調査区北側斜面の地山面に黒褐色の落ち込みとして確認した。桁行１間（東－西）×梁行４間（南－北）で、復元した桁行方向の柱間距離は北側（Ｐ1－Ｐ２）2.14m、南側（Ｐ９－Ｐ１０）2.06m。桁行方向の柱間距離は東側（Ｐ１－Ｐ９）1.09m、西側（Ｐ２－Ｐ１０）10.22mである。柱穴の覆土は単層でしまる。

ＳＢ121掘立柱建物跡(第13図、図版２)

ＭＡ45・46、ＭＢ44・45・46、ＭＣ45区に位置する。地山面に黒褐色の落ち込みとして確認した。９基の柱穴からなる２間×２間の建物跡。北東側の斜面を整地し、平坦面を構築した上で建物を建てたものと考えられる。また、北東側にＬ字形に幅約35～40cmの溝が確認された。建物の周囲を囲むように廻っていたものと思われるが斜面より下位では確認できなかった。柱穴４基から成るＳＡ294が南側に位置する。

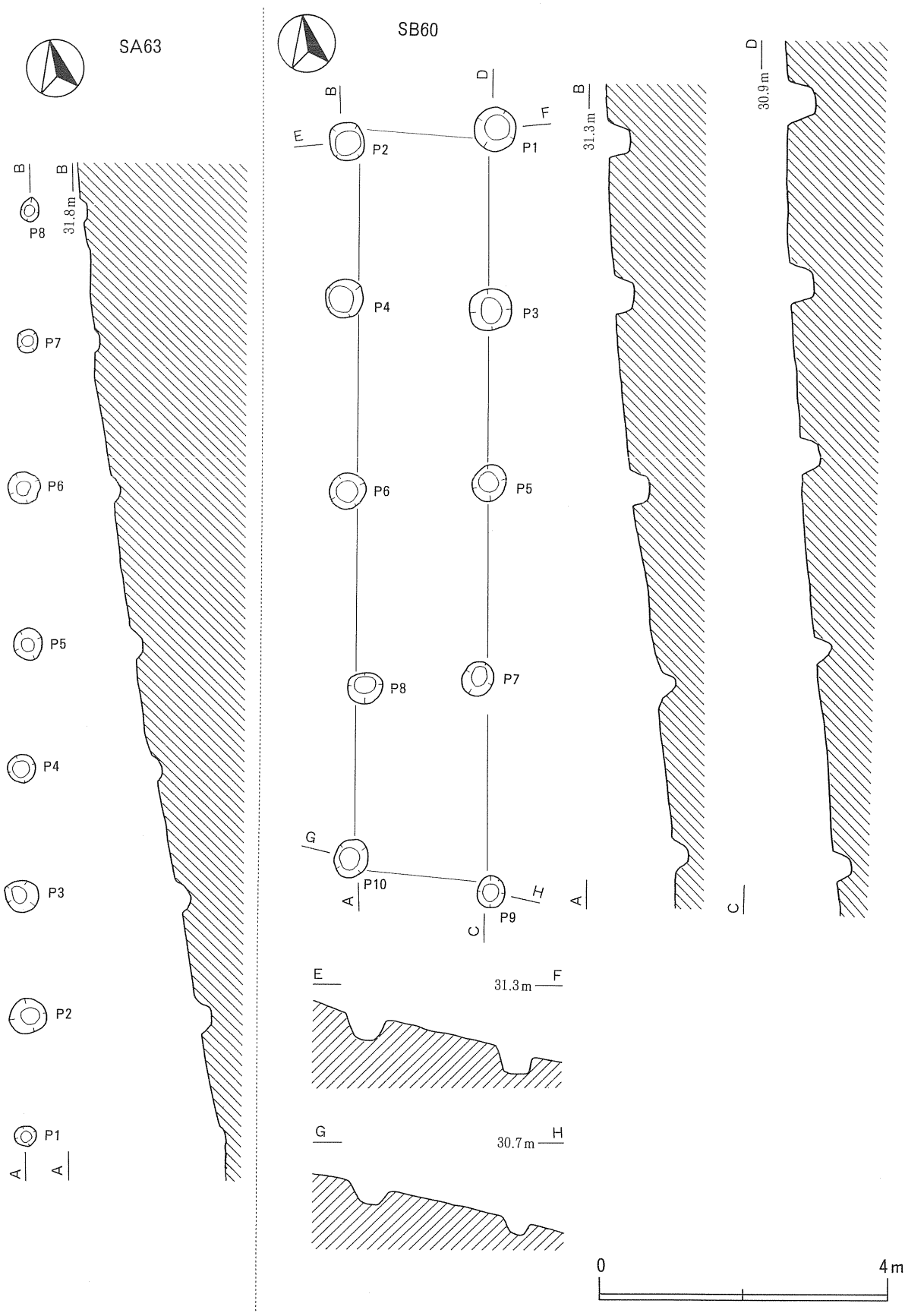
ＳＢ121の柱穴は直径約15～30cm。円形あるいは楕円形を呈する。底面に柱アタリのクボミを有するものが４基ある（Ｐ－４、５、６、９)。柱部分の直径は約15～20cm。また、Ｐ－４を除く３基には柱痕が確認できた。また建物の内外に、建物跡に含まれない柱穴様ピットも７基あり、なかに平面形が方形を呈する柱穴様ピットが３基確認される。これらの方形プランを持つ柱穴様ピットは、ＡＢライン上に並んで検出されているが、相関関係は不明である。遺物は、Ｐ－２、Ｐ－６埋土中より鉄釘が１点ずつ出土している。釘はともに江戸～明治時代の角釘である。

５　柱穴様ピット

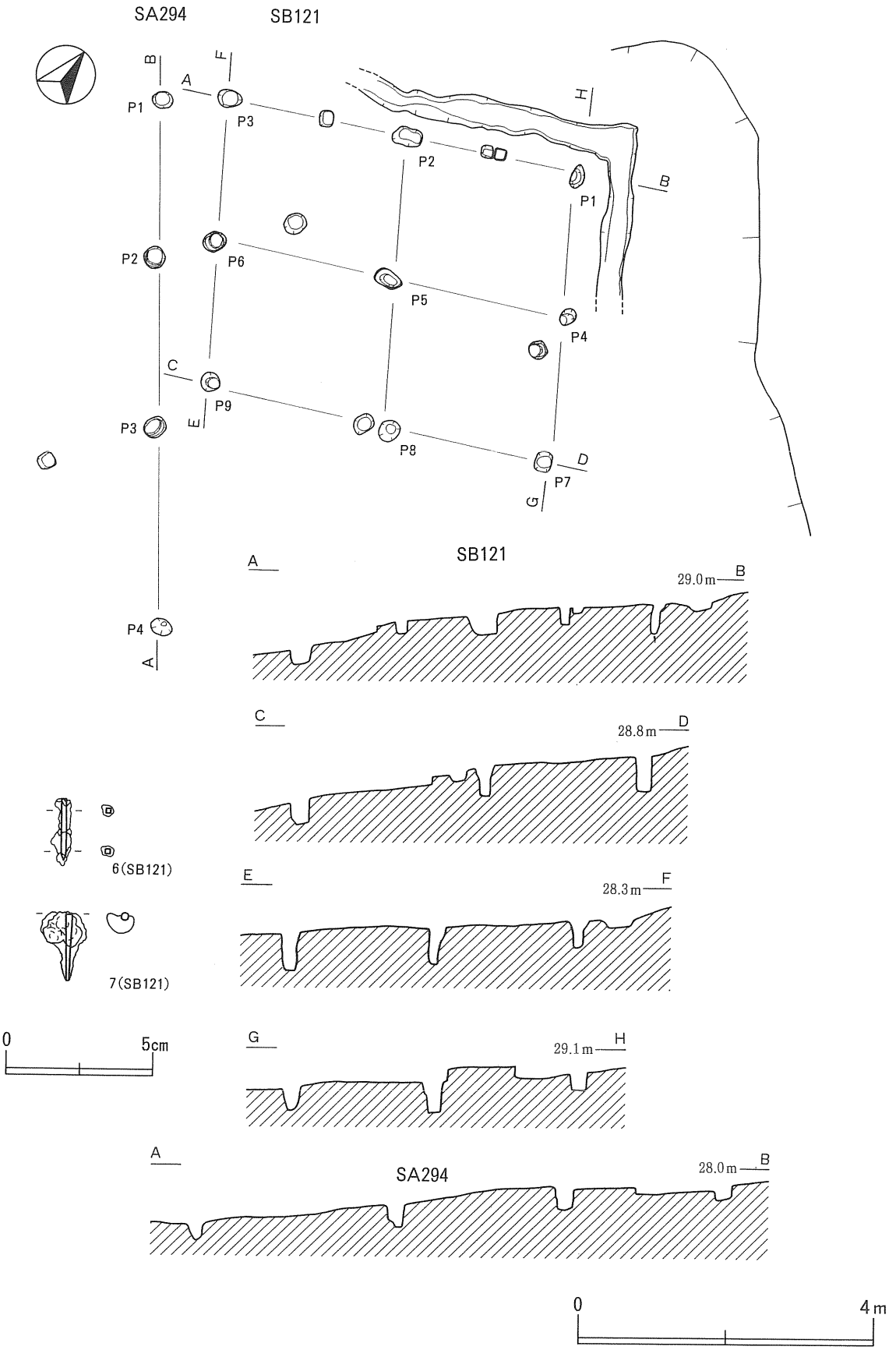
柱痕の認められる３基を掲載した。これ以外のものは第４表に記す。

ＳＫＰ38柱穴様ピット(第15図)

ＬＥ65区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。直径27cmの円形を呈する。深さ15cm。埋土は２層に分けられる。壁は現状では12～21cmの高さでやや外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。



第12図　SA 63柱穴・SA 60掘立柱建物跡



第13図　SA 294柱穴列・SB 121掘立柱建物跡

第３表－１　ＳＡ63ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱穴間距離(m)	出土遺物
P－ 1	LO62	略円形	32×31	17×16	6	29.58	～P－ 2＝1.69	
P－ 2	LN62	略円形	55×50	28×25	19	29.81	～P－ 3＝1.70	
P－ 3	LN63	略円形	51×47	26×20	17	30.10	～P－ 4＝1.82	
P－ 4	LN63	円　形	41×41	25×25	12	30.51	～P－ 5＝1.80	
P－ 5	LN64	略円形	47×42	19×18	14	30.79	～P－ 6＝2.16	
P－ 6	LN64	円　形	47×47	21×21	12	31.10	～P－ 7＝2.08	
P－ 7	LN65	略円形	34×30	17×16	8	31.40	～P－ 8＝1.82	
P－ 8	LN65	楕円形	36×28	16×15	9	31.60	－	

第３表－２　ＳＡ294ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱穴間距離(m)	出土遺物
P－ 1	MC45	楕円形	29×24	20×18	16	27.58	～P－ 2＝2.15	
P－ 2	MC45	略円形	31×30	22×21	30	27.44	～P－ 3＝2.30	
P－ 3	MB44	略円形	32×27	25×14	31	27.18	～P－ 4＝2.75	
P－ 4	MB44	楕円形	31×22	7× 6	22	26.98	－	

第３表－３　ＳＢ60ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱穴間距離(m)	出土遺物
P－ 1	LK68	略円形	63×59	36×35	39	30.12	～P－ 2＝2.09	
P－ 2	LL68	方　形	54×49	37×34	31	30.72	～P－ 4＝2.23	
P－ 3	LK67	略円形	60×60	38×30	32	30.10	～P－ 1＝2.54	
P－ 4	LL68	略円形	57×56	40×35	28	30.66	～P－ 6＝2.73	
P－ 5	LK67	楕円形	54×47	29×27	27	29.97	～P－ 3＝2.48	
P－ 6	LL67	略円形	54×50	31×31	26	30.43	～P－ 8＝2.79	
P－ 7	LK66	楕円形	50×44	30×21	23	29.76	～P－ 5＝2.74	
P－ 8	LL66	楕円形	52×46	31×25	20	30.06	～P－10＝2.41	
P－ 9	LK65	楕円形	46×40	26×23	22	29.41	～P－ 7＝2.99	
P－10	LL66	楕円形	57×48	32×29	27	29.86	～P－ 9＝2.02	

第３表－４　ＳＢ121ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱穴間距離(m)	出土遺物
P－ 1	MB46	楕円形	33×18	14× 7	38	28.27	～P－ 2＝2.36	
P－ 2	MB45	楕円形	41×26	31×15	27	28.18	～P－ 3＝2.54 ～P－ 5＝1.94	鉄釘６
P－ 3	MC45	楕円形	34×26	21×20	22	27.74	～P－ 6＝1.96	
P－ 4	MA45	楕円形	25×20	13×10	50	28.04	～P－ 1＝1.91 ～P－ 5＝2.51	
P－ 5	MB45	楕円形	39×23	19×11	28	28.12	－	
P－ 6	MC45	楕円形	33×28	18×16	50	27.42	～P－ 5＝2.46 ～P－ 9＝1.90	鉄釘７
P－ 7	MA45	方　形	28×23	19×16	49	27.94	～P－ 4＝1.98	
P－ 8	MB45	略円形	31×28	14×13	40	27.86	～P－ 5＝2.01 ～P－ 7＝2.14	
P－ 9	MB44	略円形	27×26	16×15	32	27.45	～P－ 8＝2.56	

ＳＫＰ52柱穴様ピット（第15図）

ＬＣ67・ＬＤ67区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。斜面に対して垂直に掘りこむ。確認面で直径41cmの円形を呈し深さ23cmである。また柱痕は直径12cmの円形を呈し深さ12cmである。埋土は２層に分けられる。壁は現状では14～28cmの高さでやや外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫＰ56柱穴様ピット（第15図、図版２）

ＭＢ49区に位置する。にぶい黄褐色のプランとして地山面で確認した。長軸153cm、短軸148cmのほぼ円形を呈し深さ50cmである。埋土は７層に分けられる。壁は現状では42～54cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

第４表　柱穴様ピット一覧

ピット番号	検出グリット	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	重複状況
2	ＬＧ60	円形	14	12	10	23.03	
3	ＬＦ61	楕円形	16	10	14	22.21	
4	ＬＩ54	円形	22	20	22	19.31	
5	ＬＩ54	円形	18	12	14	19.36	
6	ＬＩ54	円形	19	14	14	19.41	
7	ＬＩ54	円形	22	20	8	19.57	
8	ＬＩ53	円形	15	14	14	17.98	
13	ＬＩ53	円形	19	17	20	17.99	ＳＫＰ14
14	ＬＩ53	円形	20	19	20	17.99	ＳＫＰ13
15	ＬＦ69	楕円形	22	11	17	23.93	
16	ＬＦ69	楕円形	18	13	19	23.94	
17	ＬＦ68	楕円形	15	12	18	23.94	
18	ＬＦ68	円形	20	17	18	24.03	
19	ＬＦ68	円形	24	20	13	23.23	
20	ＬＦ68	楕円形	21	14	17	24.01	
21	ＬＦ67	楕円形	22	14	14	24.26	
22	ＬＦ68	円形	20	18	9	24.98	
23	ＬＧ70	円形	18	15	10	23.19	
24	ＬＦ67	円形	23	18	12	24.37	
25	ＬＦ67	円形	18	15	17	24.09	
26	ＬＦ66・67	円形	20	18	22	24.13	
27	ＬＦ66	楕円形	22	15	12	24.46	
28	ＬＧ66	楕円形	15	12	11	24.56	
29	ＬＧ65・66	楕円形	30	23	25	24.44	
30	ＬＧ66	楕円形	20	16	12	24.81	
31	ＬＨ65	楕円形	20	17	26	24.29	
32	ＬＦ65	楕円形	22	18	39	23.69	
33	ＬＦ65	円形	16	15	12	24.09	
34	ＬＦ66	円形	12	10	22	23.76	
35	ＬＦ65	円形	14	12	20	23.22	
36	ＬＦ65	円形	20	18	27	23.61	
37	ＬＥ65	楕円形	17	10	14	22.84	
38	ＬＥ65	円形	27	26	15	21.85	
39	ＬＥ64	円形	15	13	8	21.85	
40	ＬＥ64	円形	18	15	12	21.84	
43	ＬＥ65	円形	14	13	8	21.51	
44	ＬＤ65	円形	18	17	16	20.53	
45	ＬＤ64	楕円形	24	20	11	20.98	
46	ＬＤ65	円形	18	15	27	21.98	
47	LE・LF66	円形	19	16	16	23.19	
48	ＬＤ67	円形	18	13	36	21.73	
49	ＬＤ66	円形	16	15	16	21.25	
50	ＬＤ64	円形	20	19	20	20.98	
52	LC・LD67	不整形	42	35	26	21.53	
53	ＬＣ68	円形	18	16	15	21.47	
54	ＬＤ68	円形	16	15	10	22.18	
56	ＭＢ49	円形	144	138	50	29.11	
58	ＭＢ49	円形	28	27	7	29.38	
64	LN・LO63	楕円形	57	50	14	30.31	
65	LN・LO63	円形	40	35	10	30.57	
66	ＬＯ63	円形	38	37	10	30.21	
67	ＬＯ63	円形	37	36	16	30.37	
68	ＬＯ63・64	円形	58	55	20	30.71	
69	ＬＯ64	円形	43	40	21	30.92	
70	ＬＯ64	円形	44	42	12	31.19	
71	ＬＮ64	円形	43	41	8	30.88	
72	ＬＮ64	円形	55	47	10	31.01	
73	ＬＮ64	円形	37	42	39	31.16	
74	ＬＮ64・65	円形	40	39	17	31.49	
75	ＬＮ63	楕円形	42	29	8	30.76	
76	ＬＯ63	円形	44	40	14	30.64	
77	ＬＯ63	円形	39	38	10	30.73	
78	LN・LO64	円形	37	34	11	30.06	
79	ＬＮ65	円形	60	43	16	31.49	
80	ＬＯ63	楕円形	46	42	8	30.47	
81	ＬＯ63	楕円形	45	40	10	30.43	
82	ＬＰ63	円形	40	38	13	30.45	
83	ＬＯ63	楕円形	36	29	10	30.68	
84	ＬＯ64	円形	48	45	25	30.81	
85	LO・LP64	円形	41	39	13	30.68	
86	ＬＯ64	円形	51	47	22	30.91	
87	ＬＯ64	円形	63	60	18	30.98	
88	ＬＯ64	円形	45	44	24	31.26	
89	ＬＯ64	楕円形	65	59	15	31.59	
94	ＬＩ70	円形	31	22	13	27.08	
97	ＬＩ53	円形	20	18	14	17.64	
98	ＬＩ53	楕円形	24	19	20	17.75	
99	ＬＩ52	円形	17	16	22	17.04	
100	ＬＨ54	円形	27	25	21	19.75	
103	ＬＦ62	円形	27	20	25	24.66	
105	ＬＯ58	円形	21	20	20	24.65	
106	ＬＰ58	円形	38	37	32	27.24	
107	ＬＰ58	楕円形	26	21	26	23.45	
108	ＬＨ55	円形	21	19	20	19.93	
109	ＬＨ55	円形	21	20	12	19.95	
110	ＬＨ54	円形	21	20	18	19.91	
111	ＬＨ54	円形	23	21	16	19.86	
112	ＬＭ61	円形	17	14	24	28.08	
113	ＬＨ55	円形	28	26	16	20.27	
114	ＬＨ55	楕円形	33	16	15	20.29	
115	ＬＲ60	楕円形	29	23	28	23.78	
122	ＭＢ46・47	円形	20	19	35	28.84	
123	ＭＢ46	楕円形	21	17	31	28.61	
124	ＬＯ47	円形	29	28	16	27.32	
125	LO・LP48	楕円形	40	33	17	27.85	
126	ＭＢ48	楕円形	15	10	10	29.24	
127	ＭＢ48	円形	16	15	12	29.39	
128	ＭＢ48	円形	19	17	12	29.39	
129	ＭＢ48	円形	19	18	17	29.24	
130	ＭＢ48	楕円形	19	15	17	29.23	
131	ＭＢ48	円形	17	16	13	29.29	
132	ＭＢ48	円形	22	20	16	29.28	
133	ＭＣ48	円形	16	15	11	29.16	
134	ＭＢ49	円形	19	18	13	29.57	
135	ＭＣ49	円形	16	13	12	29.48	
164	ＬＴ54	楕円形	29	21	16	26.63	
165	ＬＳ54	円形	20	19	19	25.85	
166	ＬＴ53	円形	24	20	12	26.71	
167	ＬＳ53	円形	22	19	8	26.52	
168	ＬＳ54	楕円形	19	14	9	25.85	
169	ＬＳ53	楕円形	21	15	12	26.86	
170	ＬＳ53	円形	22	19	12	26.38	
171	ＬＳ53	円形	21	18	25	25.82	
172	ＬＳ53	楕円形	25	18	23	26.33	
173	ＬＳ52	円形	15	14	10	26.91	
174	ＬＲ52	円形	23	22	18	26.54	
175	ＬＲ51	楕円形	23	19	24	27.48	
176	ＬＲ52	円形	21	20	11	26.81	
177	ＬＱ51	円形	19	18	15	26.79	
183	ＭＢ35	円形	53	50	12	19.12	
184	ＭＢ35	円形	34	32	21	18.95	
201	ＬＴ35	円形	60	45	22	18.51	
285	ＭＤ37	楕円形	46	38	47	18.18	
286	ＬＳ39	楕円形	50	15	86	23.61	
287	ＭＡ37	円形	43	41	13	20.04	
295	ＭＪ37	楕円形	25	18	14	13.89	

6　土坑

ＳＫ09土坑(第15図、図版２)

ＬＪ54・55区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸を南北にとり、長軸87cm×短軸47cmの楕円形を呈し深さ22cmである。斜面に垂直に位置する。埋土は２層に分けられる。壁は現状では６～22cmの高さで南側の壁は緩やかに外傾しながら、また北側の壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ10土坑(第15図、図版３)

ＬＩ54・ＬＪ54区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸87cm×短軸64cmの楕円形を呈し深さ26cmである。埋土は２層に分けられる。壁は現状では18～20cmの高さで北東側の壁はやや外傾しながら、また南西側の壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ55土坑(第15図、図版３)

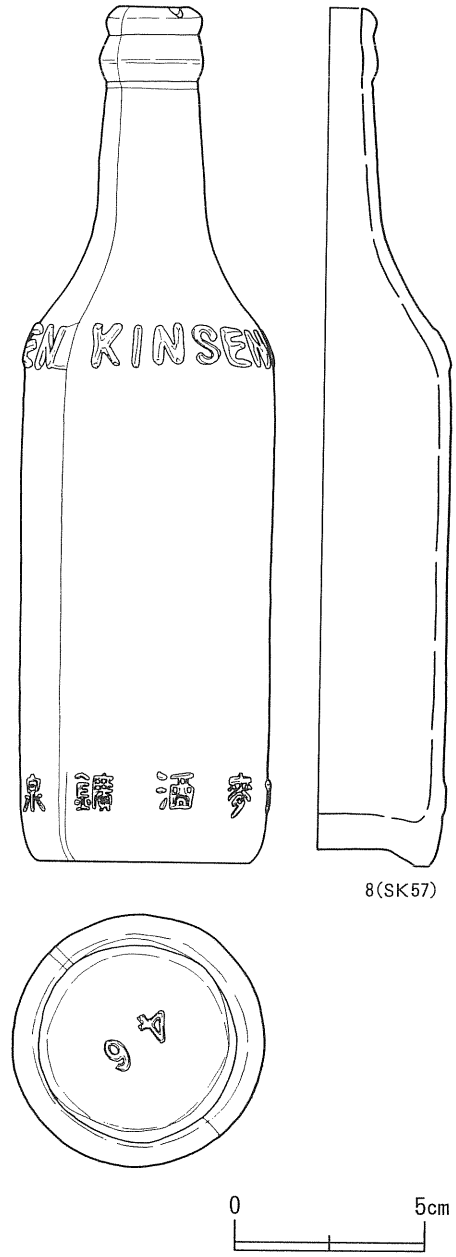
ＬＧ68区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸106cm、短軸54cmの不整形を呈し深さ46cmである。埋土は３層に分けられる。壁は現状では25～52cmの高さで北西側の壁はやや外傾しながら、また南東側の壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ57土坑(第14･15図、図版３)

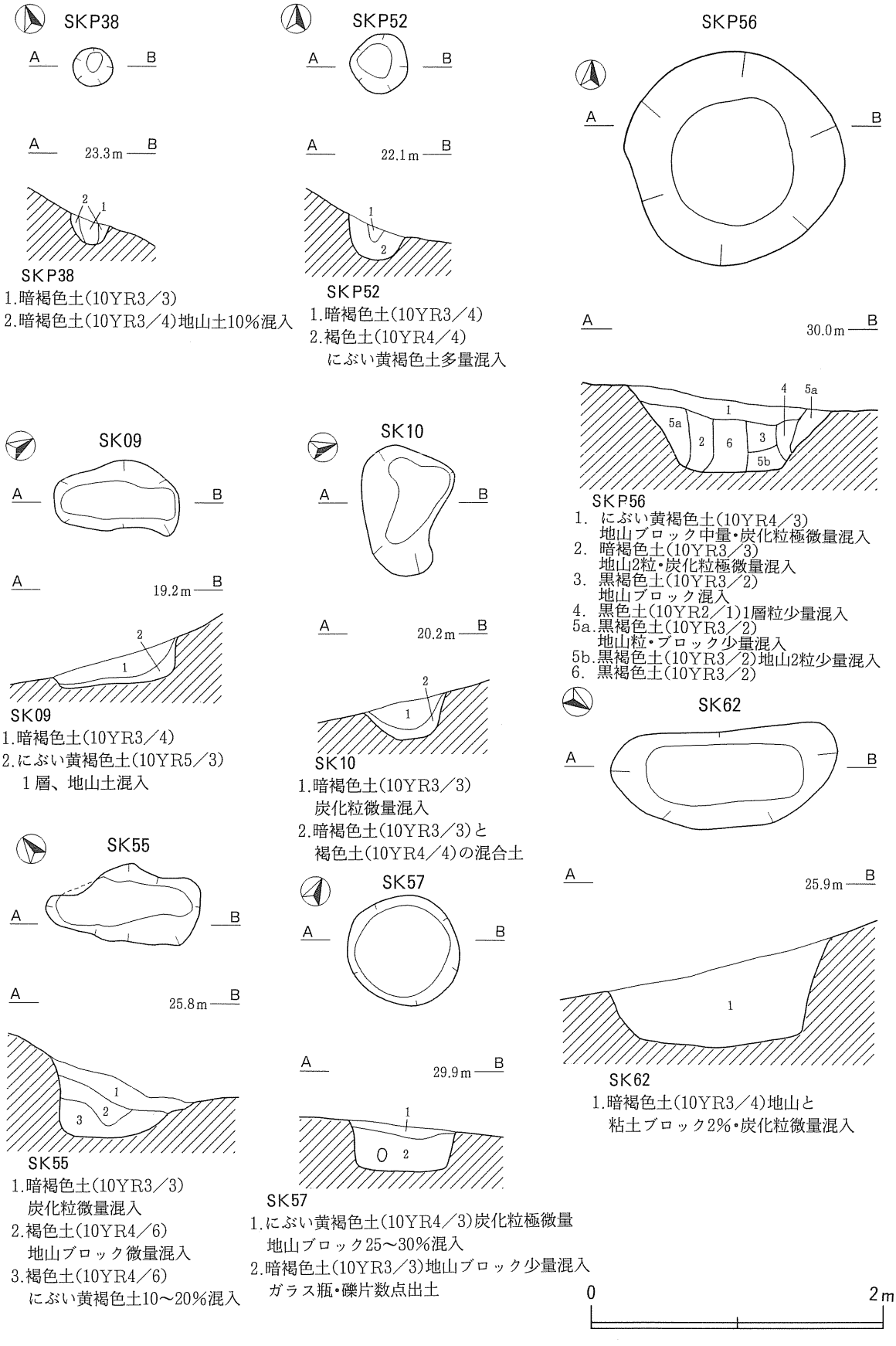
ＭＡ49・ＭＢ49区に位置する。にぶい黄褐色のプランとして地山面で確認した。長軸80cm、短軸75cmのほぼ円形を呈し深さ34cmである。埋土は２層に分けられる。壁は現状では26～32cmの高さでやや外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。出土遺物は底面より約７cmの地点からガラス瓶が出土している。ガラスはオリーブがかる透明色であり「46」「日本麥酒鑛泉株式会社」「ＫＩＮＳＥＮ」の銘がある。

ＳＫ62土坑(第15図、図版３)

ＬＩ60・ＬＪ60区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸158cm、短軸66cmの楕円形を呈し深さ60cmである。埋土は単層である。壁は現状では33～65cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。



第14図　SK 57出土ガラス瓶



第15図　SKP 38・52・56柱穴様ピット、SK 09・10・55・57・62土坑

ＳＫ90土坑(第16図、図版３)

ＬＬ64区に位置する。黒色のプランとして地山面で確認した。長軸217cm、短軸103cmの不整形を呈し深さ30cmである。埋土は２層に分けられる。壁は現状では25～29cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ93土坑(第16図、図版３)

ＬＫ65区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸179cm、短軸90cmの不整形を呈し深さ24cmである。埋土は単層である。壁は現状では16～20cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ96土坑(第16図、図版３)

ＬＬ62区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。長軸194cm×短軸101cmの楕円形を呈し深さ24cmである。埋土は２層に分けられる。壁は現状では16cmの高さで立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ104土坑(第16図、図版３)

ＬＨ54・ＬＨ55区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。長軸114cm、短軸98cmの楕円形を呈し深さ40cmである。埋土は２層に分けられる。壁は現状では20～46cmの高さでやや外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ138土坑(第16図、図版４)

ＭＡ35・ＭＢ35区に位置する。褐色のプランとして地山面で確認した。ＳＫ236と重複している。新旧関係は本土坑が旧い。規模•形態はＳＫ236と重複しているため全容は不明だが、現状では長軸60cm、短軸66cmの楕円形を呈し深さ16cmである。埋土は単層である。壁はＳＫ236と重複しているため南側の壁はないが、北側の壁は22cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はやや傾斜しているが、凹凸がない。遺物は出土していない。

ＳＫ202土坑(第16図)

ＭＡ35・ＭＢ35区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。直径85cmの円形を呈し深さ８cmである。埋土は単層である。壁は現状では８～10cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ221土坑(第16図)

ＬＱ43区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。長軸69cm、短軸55cmの楕円形を呈し深さ12cmである。埋土は単層である。壁は現状では９～12cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ222土坑(第16図、図版４)

ＬＱ44区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。長軸69cm、短軸60cmの楕円形を呈し深さ８～10cmである。埋土は単層である。壁は現状では８～10cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ223土坑(第16図、図版４)

ＬＱ44区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。長軸60cm、短軸57cmのほぼ円形を呈し深さ12cmである。埋土は単層である。壁は現状では８～11cmの高さで緩やかに外傾しながら

立ち上がる。底面はやや傾斜しているが、凹凸はない。遺物は出土していない。

ＳＫ224土坑(第17図、図版４)

ＬＱ44区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸68cm、短軸53cmの楕円形を呈し深さ10cmである。埋土は単層である。壁は現状では８～12cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ225土坑(第17図)

ＬＱ43区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸61cm、短軸52cmの楕円形を呈し11cmである。埋土は単層である。壁は現状では６～12cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はやや傾斜しているが、凹凸はない。遺物は出土していない。

ＳＫ236土坑(第16図)

ＭＡ35・ＭＢ35区に位置する。にぶい黄褐色のプランとして地山面で確認した。ＳＫ138と重複している。新旧関係は本土坑が新しい。長軸60cm、短軸37cmの楕円形を呈し深さ16cmである。埋土は単層である。壁は現状では10～20cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ288土坑(第17図)

ＬＳ36区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。直径93cmの円形を呈し深さ14cmである。埋土は単層である。壁は現状では８～20cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ289土坑(第17図、図版４)

ＬＴ35区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。長軸84cm、短軸82cmの円形を呈し深さ15cmである。埋土は単層である。壁は現状では９～16cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ290土坑(第17図、図版４)

ＭＣ46区に位置する。褐色のプランとして地山面で確認した。長軸90cm、短軸72cmの楕円形を呈し深さ16cm。埋土は単層である。壁は現状では９～19cmの高さで南西側の壁は緩やかに外傾しながら、また北東側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ291土坑(第17図、図版４)

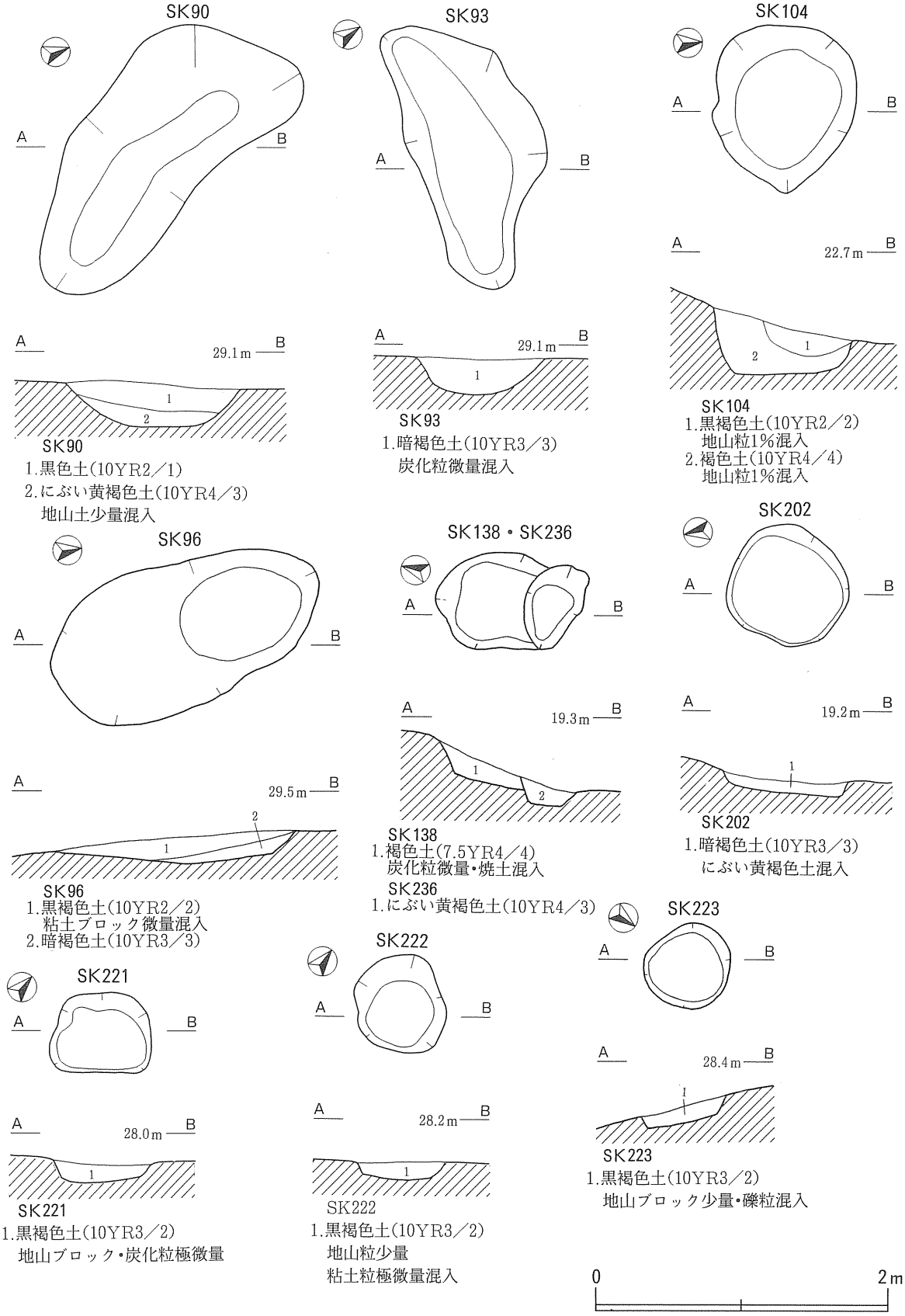
ＭＦ36・ＭＧ36区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。長軸132cm、短軸115cmのほぼ円形を呈し深さ45cmである。埋土は単層である。壁は現状では16～49cmの高さで北東側の壁はほぼ垂直に、また南東側の壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

７　焼土遺構

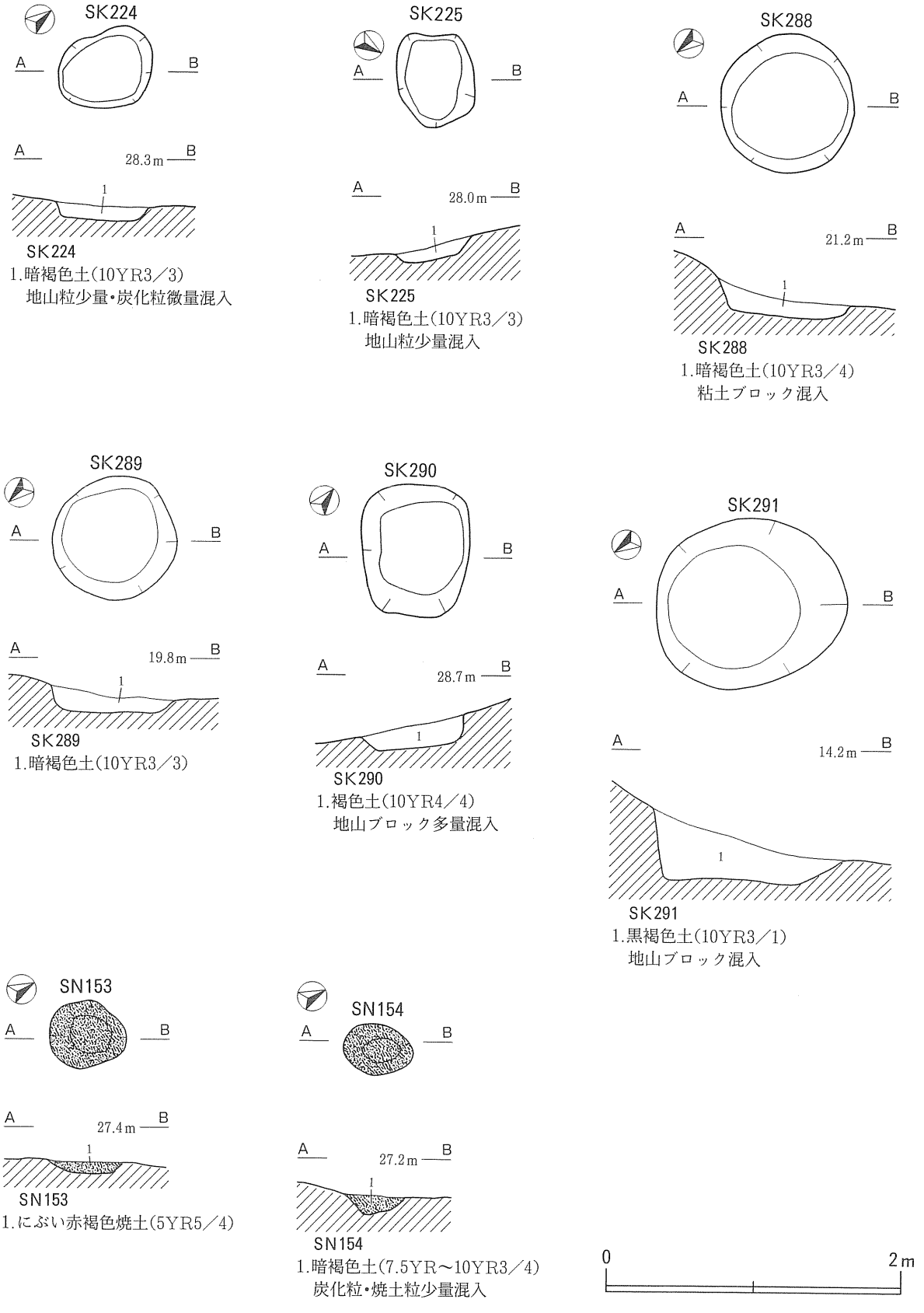
ＳＮ153焼土遺構(第17図)

ＬＭ46・ＬＮ46区に位置する。にぶい赤褐色の焼土の広がりとして地山面で確認した。長軸53cm×短軸47cmの楕円形を呈し深さ９cmである。遺物は出土していない。

ＳＮ154焼土遺構(第17図)



第16図　SK 90・93・96・104・138・202・221・222・223・236土坑



第17図　SK 224・225・288・289・290・291土坑、SN 153・154焼土遺構

ＬＭ46区に位置する。暗褐色の焼土の広がりとして地山面で確認した。長軸48cm、短軸36cmの楕円形を呈し深さ14cmである。遺物は出土していない。

8　溝跡・空堀

ＳＤ11溝跡(第18図、図版４)

ＬＫ39、ＬＬ39・40、ＬＭ39・40、ＬＮ40区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。重複はなし。長さ約7m40cm、幅約58cm、深さ10cmである。断面形はＵ字形を呈する。埋土は単層である。遺物は出土していない。

ＳＤ12溝跡(第18図、図版４)

ＬＫ39、ＬＬ39・40、ＬＭ39・40、ＬＮ40区に位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。重複はなし。長さ約7m18cm、幅約50cm、深さ13cmである。断面形はＵ字型を呈する。埋土は単層である。遺物は出土していない。

ＳＤ118溝跡(第18図、図版４)

ＬＲ51～53、ＬＳ53・54、ＬＴ54・55区に位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。調査区域内で確認された長さは約40m、幅は約36cm～80cm、深さは最深部で32cmである。断面形はＵ字型を呈する。埋土は単層である。遺物は出土していない。

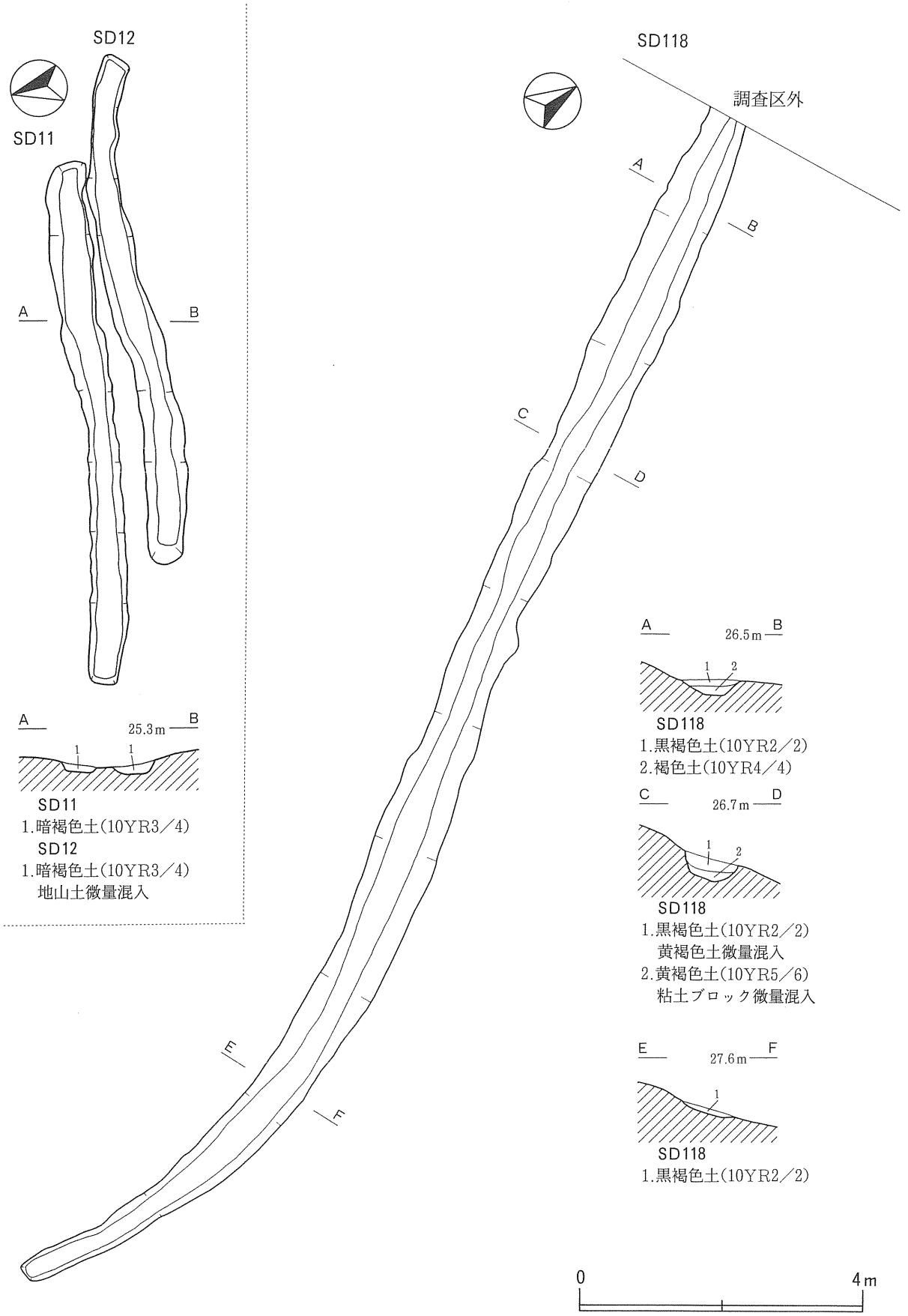
ＳＤ61空堀(第19図、図版５・６)

ＬＧ68・69、ＬＨ68～70、ＬＩ68～70、ＬＪ69・70、ＬＫ70・71、ＬＬ70・71区に位置する。北側にＳＭ01帯曲輪、南側にＳＢ60掘立柱建物跡が隣接する。調査前の現況で段状の平坦面を示す地形で確認した。自然の沢を利用して開削された空堀であり、斜面上で等高線に直交するように構築された竪堀である。西側を国道７号に切られる。北西－南東に直線的に延びる空堀跡である。現存する部分は全長約21ｍである。幅は西から東にかけて広がりをみせ、東端でまた狭くなる。開口部で約2.4～６ｍ、底面部で約0.8～4.5ｍを測る。現存する西端が最深部にあたり、深さは約2.8mで徐々に浅くなる。断面形は逆台形の箱堀形を呈する。埋土は13層に分けられる。遺物は出土していない。

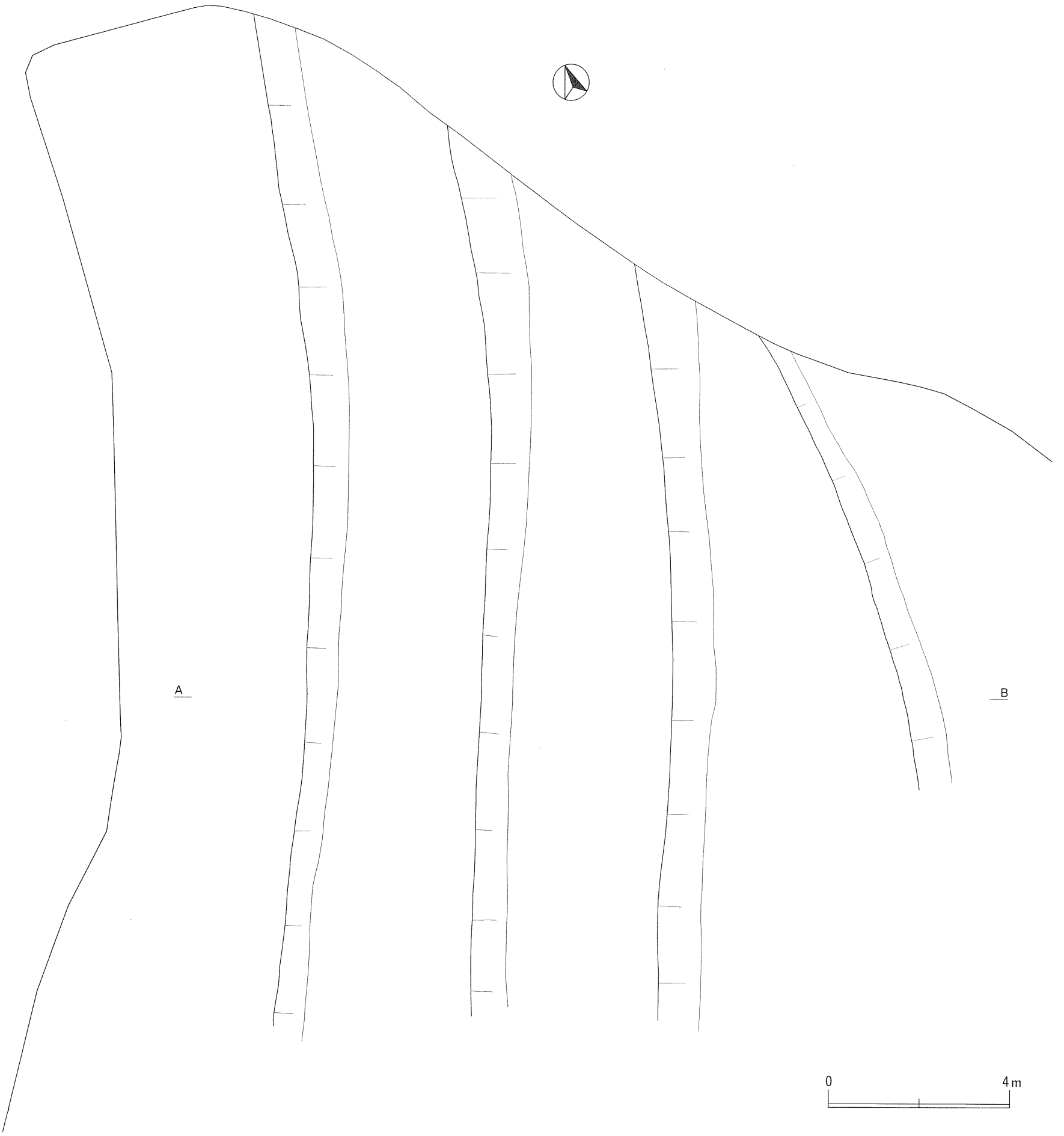
9　帯曲輪

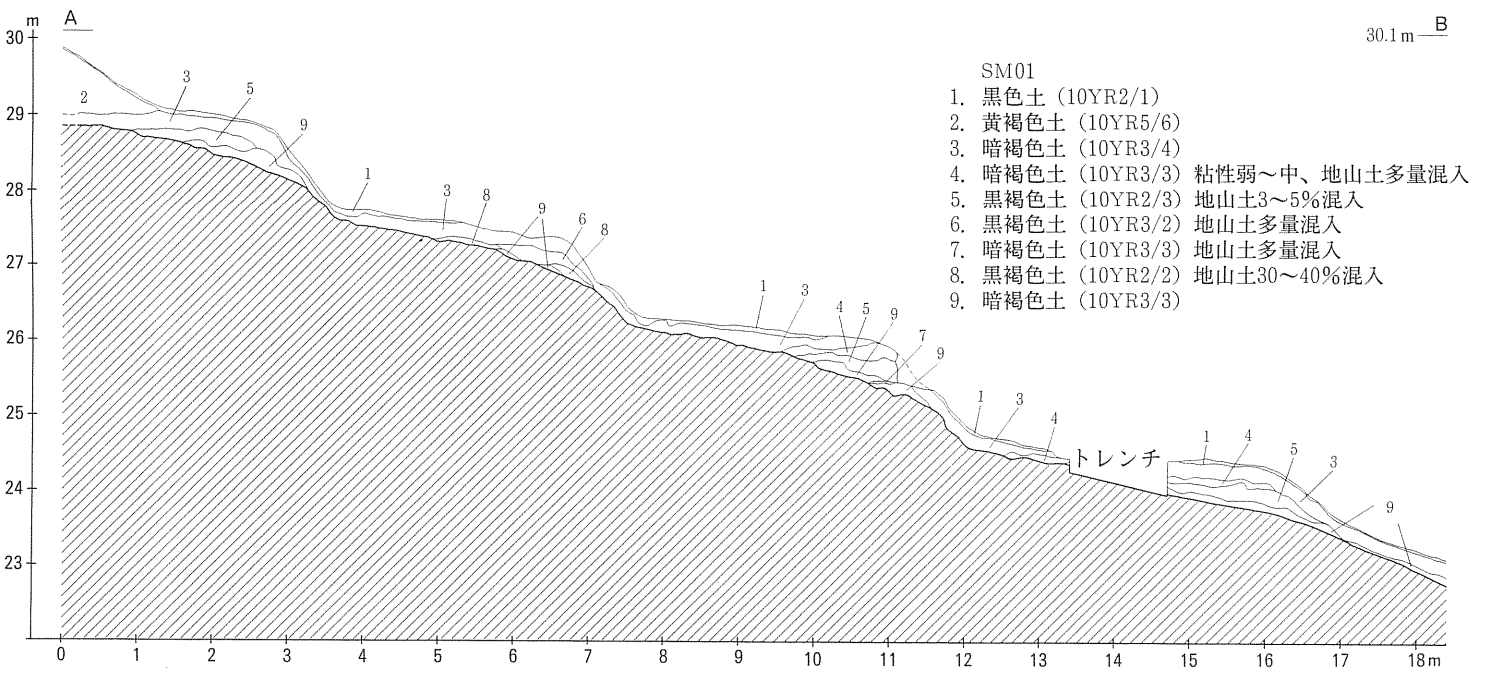
ＳＭ01帯曲輪(第20図、図版６)

ＬＦ72・73、ＬＧ71～75、ＬＨ71～76、ＬＩ71～76、ＬＪ71～73区、調査区北西端に位置する。北側は自然の沢に落ち込む急斜面となる。南側にＳＤ61空堀がある。調査前の現況で4段の階段状を示す地形で確認した。西側が国道７号に破壊されている。規模は、現状においては、大規模な階段状を呈し、４段が残存する。各段の本遺構構築時の地表面と考えられる層までの比高差は、西側から、１～２段目で約70cm、２～３段目で約65cm、３～４段目で約85cmを測る。現状での全長は東西方向に約8.5m、南北に約９～24mを測る。埋土は斜面を地山まで掘削し排土を下に盛ることによって段と平坦面がつくられている。調査区外に接する西側では表土の上に地山掘削土が大量に堆積するが、国道７号の工事の際に流入した排土と考えられる。埋土は９層に分けられる。遺物は出土していない。

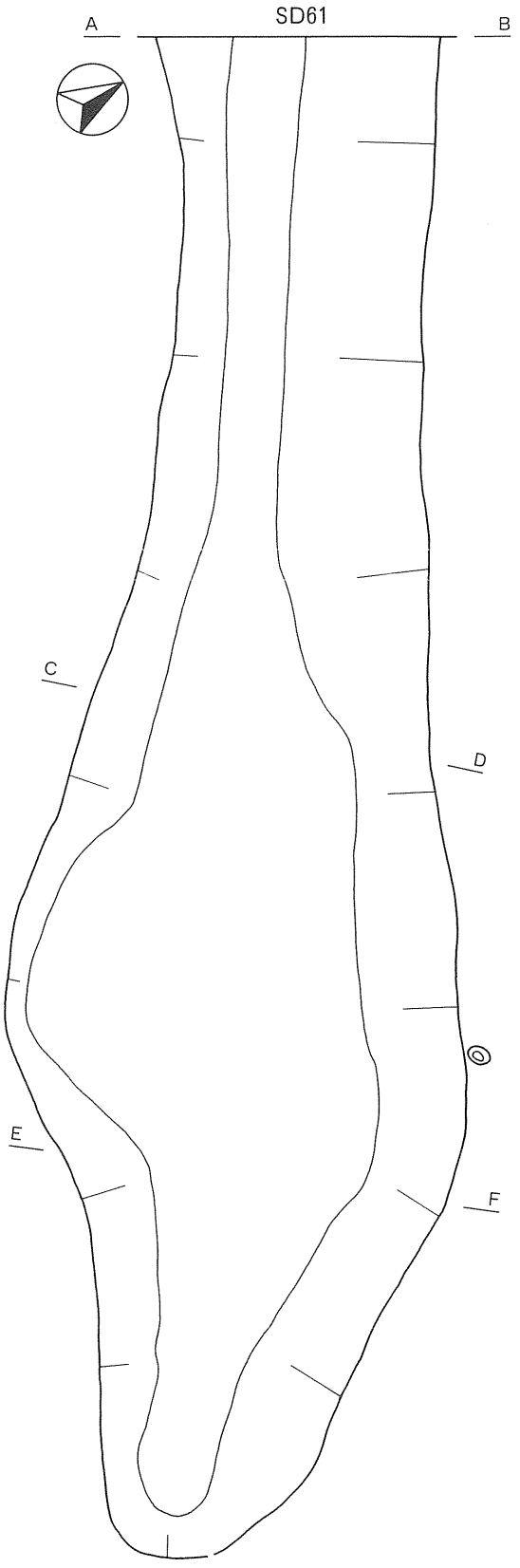


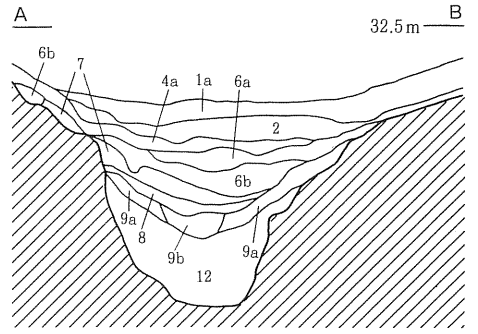
第18図　SD 11・12・118溝跡

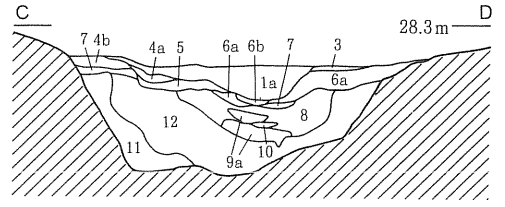


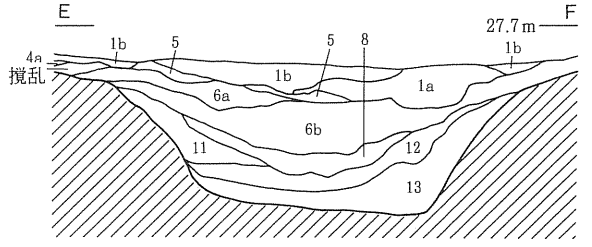


第19図　SM01帯曲輪



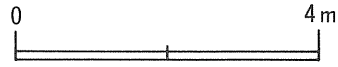






SD61

1a. 褐色土(10YR4／4)地山ブロック多量混入
1b. 黒褐色土(10YR3／2)地山ブロック・地山土・色土30～40%混入
2. 褐色土(10YR4／4)地山土・地山ブロック1～2%・黒褐色土5%混入
3. 暗褐色(10YR3／3)地山ブロック1～2%混入
4a. 暗褐色土(10YR3／3)地山ブロック3%・褐色土30～40%混入
4b. 暗褐色土(10YR3／3)地山ブロック多量混入
5. 黒褐色土(10YR3／2)～暗褐色土(10YR3／3)地山土30～40%・地山ブロック10%混入
6a. 黒褐色土(10YR2／2)
6b. 黒褐色土(10YR2／2～10YR2／1)地山粒微量混入
7. にぶい黄褐色土(10YR4／3)地山ブロック40%混入
8. 暗褐色土(10YR3／3)地山粒微量・炭化粒1～2%混入
9a. 黒褐色土(10YR2／3)
9b. 黒色土(10YR2／1)炭化粒1～2%混入
10. にぶい黄褐色土(10YR4／3)
11. 褐色土(10YR4／6)地山ブロック多量混入
12a. 褐色土(10YR4／4)地山ブロック微量・炭化粒10～15%混入
12b. 褐色土(10YR4／6)炭化物1%混入
13. 暗褐色土(10YR3／4)



第20図　SD 61空堀

第２節　遺構外出土遺物

鹿来館跡における遺構外の遺物は縄文時代と近世以降のものに分けられる。全体的にＢ区に多く、特に近世以降の陶磁器、土器はＢ区北側の平坦面（ＬＰ50周辺）から多く出土した。斜面から出土した遺物は流動した可能性が高い。

１　縄文時代の遺物（第21図）

この時代の遺物として石器が23点出土した。そのうち3点が石匙であり、その他2次加工のある剥片や使用痕のある剥片が数点のほかは、剥片である。9•10•12は石匙である。9は表面に2本の稜線を持つ剥片を素材とする。背面縁辺に調整が加えられており、末端のほぼ規則的な剥離が刃部と思われる。腹面にはつまみとなる部分を除いてほとんど調整は加えられていない。10は縦長剥片を素材とする。背面を全面調整しており、右側辺に使用痕を残す。末端は急角度の刃部を持ち、掻器としての使用も考えられる。腹面にはつまみとなる部分と、両側辺に調整が加えられているが、不連続であり、背面を調整するときに連鎖的にできた剥離の可能性がある。12はつまみ部分を欠損している。背面全面に調整を施している。刃部は右側辺で、背面と腹面の両面を調整することによって作り出されている。

11•13•14は微細な剥離を持つ剥片である。11には腹面の、基部を除くほぼ全縁辺に不連続な剥離が施されている。削器と考えられる。13は打面と左上方が欠損している。左右対称形を呈していた可能性がある。左側辺に自然面を残している。背面右側辺に微細な連続した剥離が見られ、腹面右側辺に二次加工が施される。左側辺には刃部の深さとほぼ同じ程度のところに稜線があったと見られる。腹面は刃部方向からの打撃によって大きく剥離されている。削器と考えられる。14は末端に礫皮面を残す。背面と腹面の両面右側辺に刃こぼれのような微細な剥離が見られる。背面左側辺にもこの剥片を取り出すときに楔のように入れられたと思われる調整が見られ、縦に２本の稜線を持つ。

２　近世以降の遺物

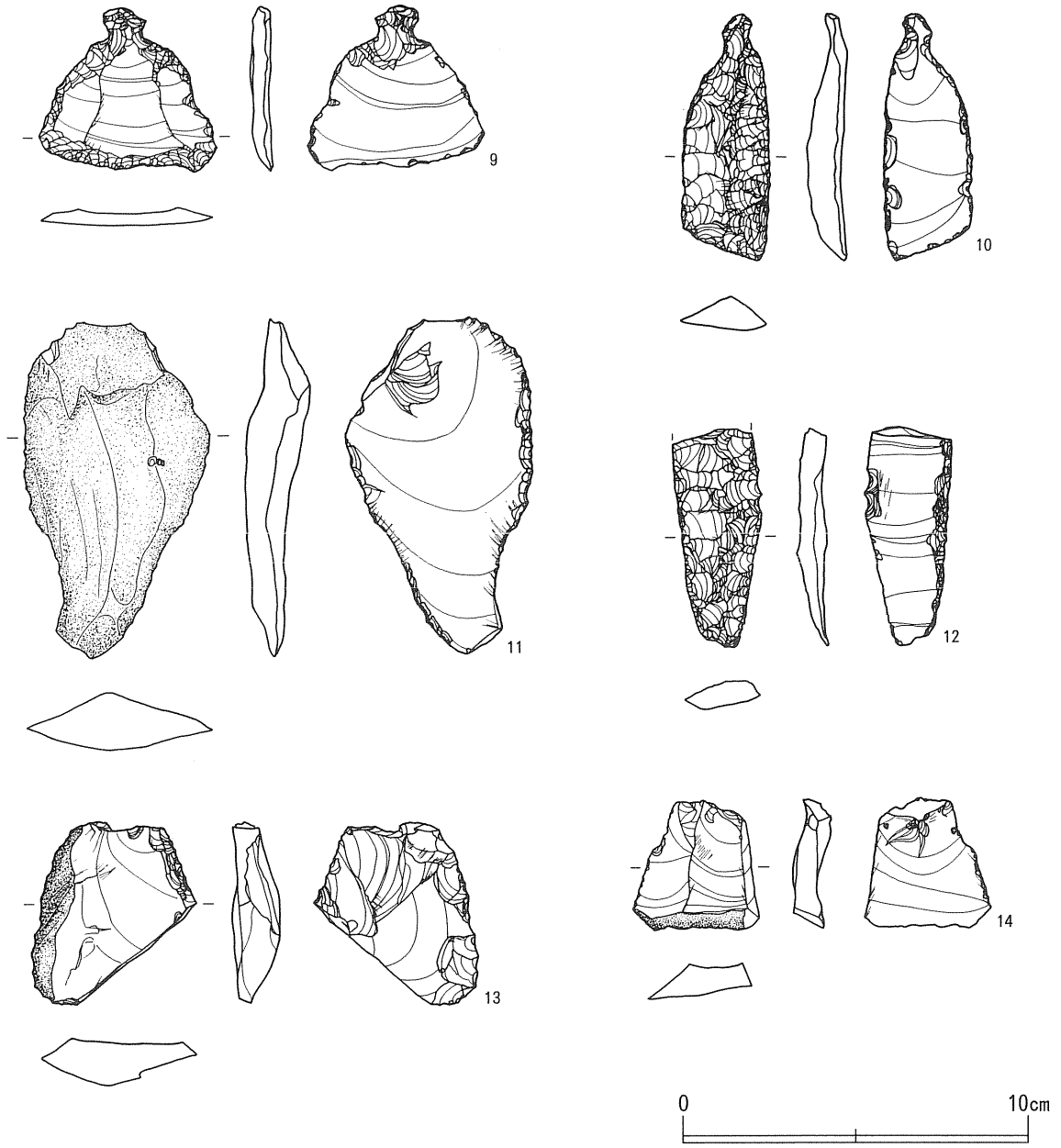
近世以降の遺物としては、陶磁器、土器、陶錘、硯、鉄製品が出土した。図示した遺物の内訳は、陶磁器28点、土器６点、陶錘２点、硯１点、鉄製品４点である。陶磁器の器種・器形・年代・特徴等については第５表に示した。

（１）陶磁器（第22～24図）

出土した陶磁器は139点である。17世紀から近代まであり、多くは肥前系であるが、瀬戸、在地のものが若干認められる。胎土の特徴は白色系、茶色系、灰色系である。釉調は透明、灰白色系、茶色系、緑色系があり、呉須を用い内外面を施釉する染付磁器が多い。器形は擂鉢、碗、皿、酒坏、徳利がある。

（２）土器（第25図）

近世以降の土器として植木鉢、風炉が出土した。43～47は植木鉢である。43•46は口縁、44•45•47は底部。胎唇土がいずれも褐色の土師質であり、ロクロ調整され、ほぼ桶形を呈する。43•46は折返し口縁で口唇部が平坦である。44•45•47は回転糸切りであり、円形の穿孔がある。47は体部に鉄の付着した痕がみられ、針金での補強による再利用が考えられる。48は風炉である。胎土は褐色の土師質



第21図　遺構外出土遺物(1)石器

であり、外面が赤褐色を呈する。形状は四角の角を落とした八角形で胴部下に風口をもつ。円筒形の内部施設が合体し、口縁部には三方向に突起が付属する。突起の上面にはススが付着している。

（３）陶錘（第26図）

49は胎土が硬く焼き締まる陶質で暗オリーブ灰色であり、中央に膨らみを持つ。長さ46.4mm、径38.2mm、重さ59.5ｇである。50の胎土は灰黄色であり、中央に膨らみを持たず49より粗雑である。長さ37.5mm、径29.3mm、重さ27.2ｇである。

（４）硯（第26図）

51は石製の硯であり、陸の隅部である。断面が一部加工されており、再利用された可能性がある。

（６）鉄製品（第26図）

52は輪金具、53は釘、54は馬耕具、55は鉄片である。

第５表　陶磁器観察表

番号	部　位	器形	器種	時　　期	産地等
15	口縁部	小鉢	磁器	近代	在地
16	底部	皿	陶器	17世紀前半	唐津系　(LO47)
17	底部	瓶	陶器	不明	唐津系
18	底部	擂鉢	陶器	近代	在地
19	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　斜格子文
20	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　二重網目文
21	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　斜格子文
22	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　菊花文か
23	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　菊花文
24	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　四方欅文
25	口縁部	酒坏	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　山水文　(LP50)
26	口縁部	猪口	染付	18世紀末～19世紀初頭	肥前系　(MC48)
27	口縁部	碗	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　菊花文
28	底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系「大明年製」銘か
29	底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　五弁花文
30	底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　五弁花文
31	底部	猪口	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　菊花文　(LT35)
32	体部	碗	染付	19世紀中頃	瀬戸系　(MG34)
33	底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系
34	底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　(LT55)
35	底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　山水文 (LO47)
36	口縁部・体部	皿	染付	近代	瀬戸系　型紙摺り
37	口縁部～底部	皿	染付	19世紀	産地不明
38	口縁部・体部	皿	染付	19世紀	産地不明　(LP46)
39	口縁部～底部	皿	染付	18世紀末～19世紀中頃	肥前系　山水文 (LO49)
40	口縁部～底部	碗	染付	19世紀初頭	瀬戸系　梅花文 (LP51)
41	口縁部～底部	碗	染付	近代	産地不明　型紙摺り
42	体部	徳利	染付	近代	産地不明　山水文 (LO47)

《参考文献》

青森県教育委員会　『茶毘館遺跡－津軽中部広域農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告－』　青森県埋蔵文化財調査報告書第110集　1988(昭和63)年

青森県教育委員会　『田名部館跡－県道金曲小川線改築工事に伴う遺跡発掘調査報告－』　青森県埋蔵文化財調査報告書第214集　1997(平成９)年

青森県立郷土館　『尻八館調査報告書』1981(昭和56)年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

秋田県教育委員会　『竜毛沢館跡発掘調査報告書－一般国道７号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第188集　1990(平成２)年

秋田県教育委員会　『石鳥谷館跡－県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第279集　1998(平成10)年

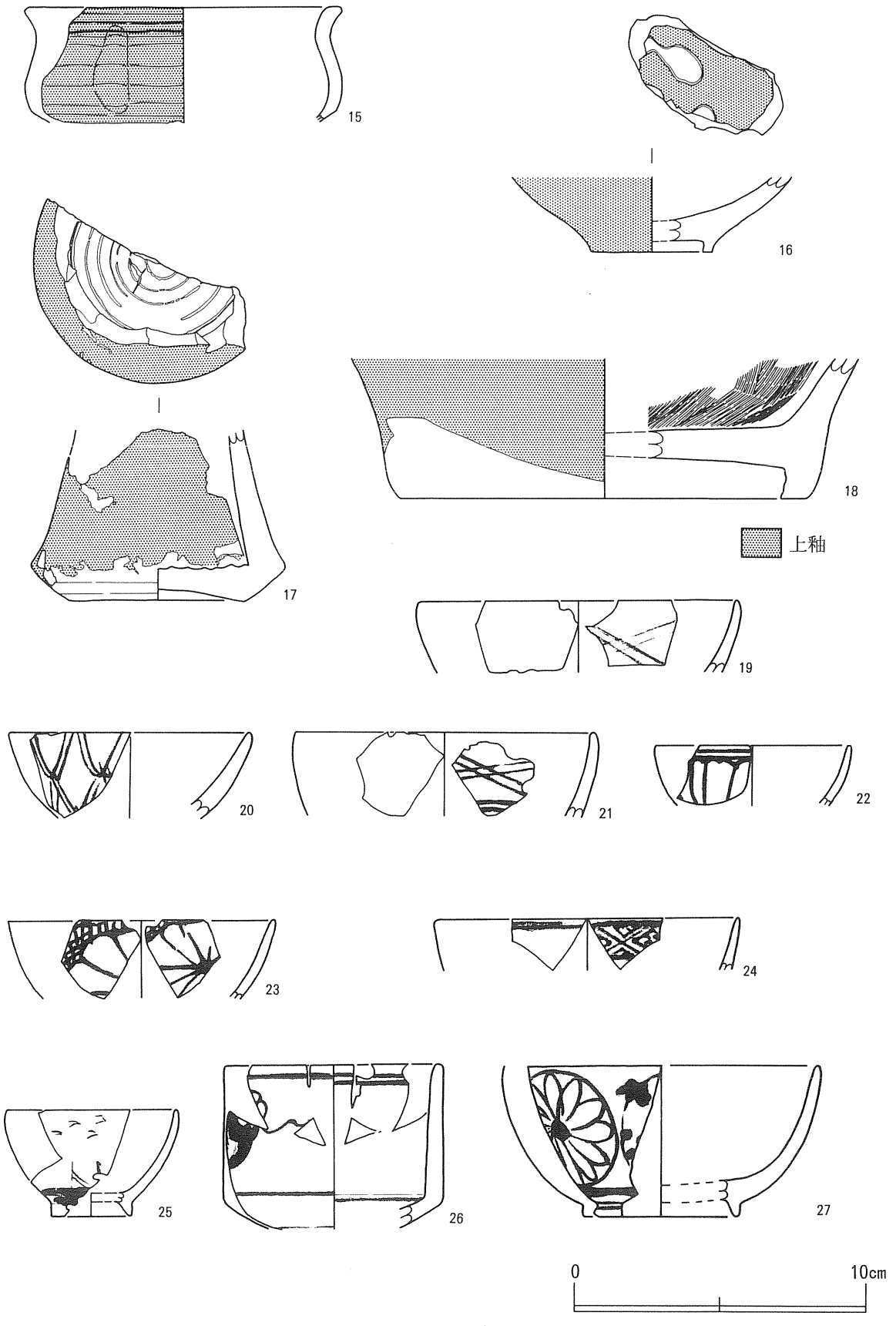
秋田県教育委員会　『脇神館跡－県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』　秋田県文化財調査報告書第284集　1999(平成11)年

秋田県教育委員会　『洲崎遺跡－県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第303集　2000(平成12)年

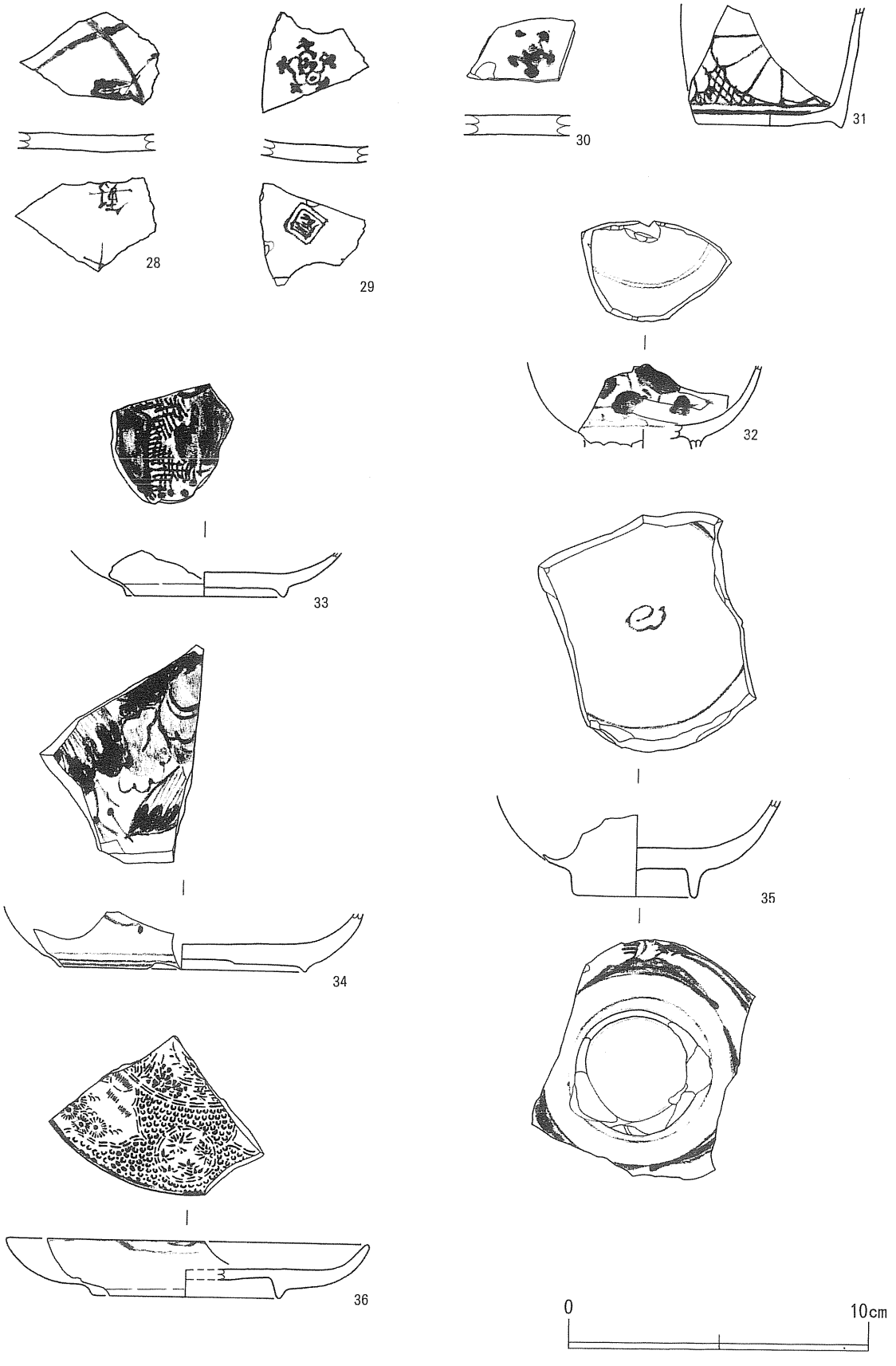
秋田市教育委員会　『寺内焼窯跡－寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査－』　1991(平成３)年

東京都建設局新宿区内藤町遺跡調査会　『東京都新宿区内藤町遺跡－放射５号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』1992(平成４)年

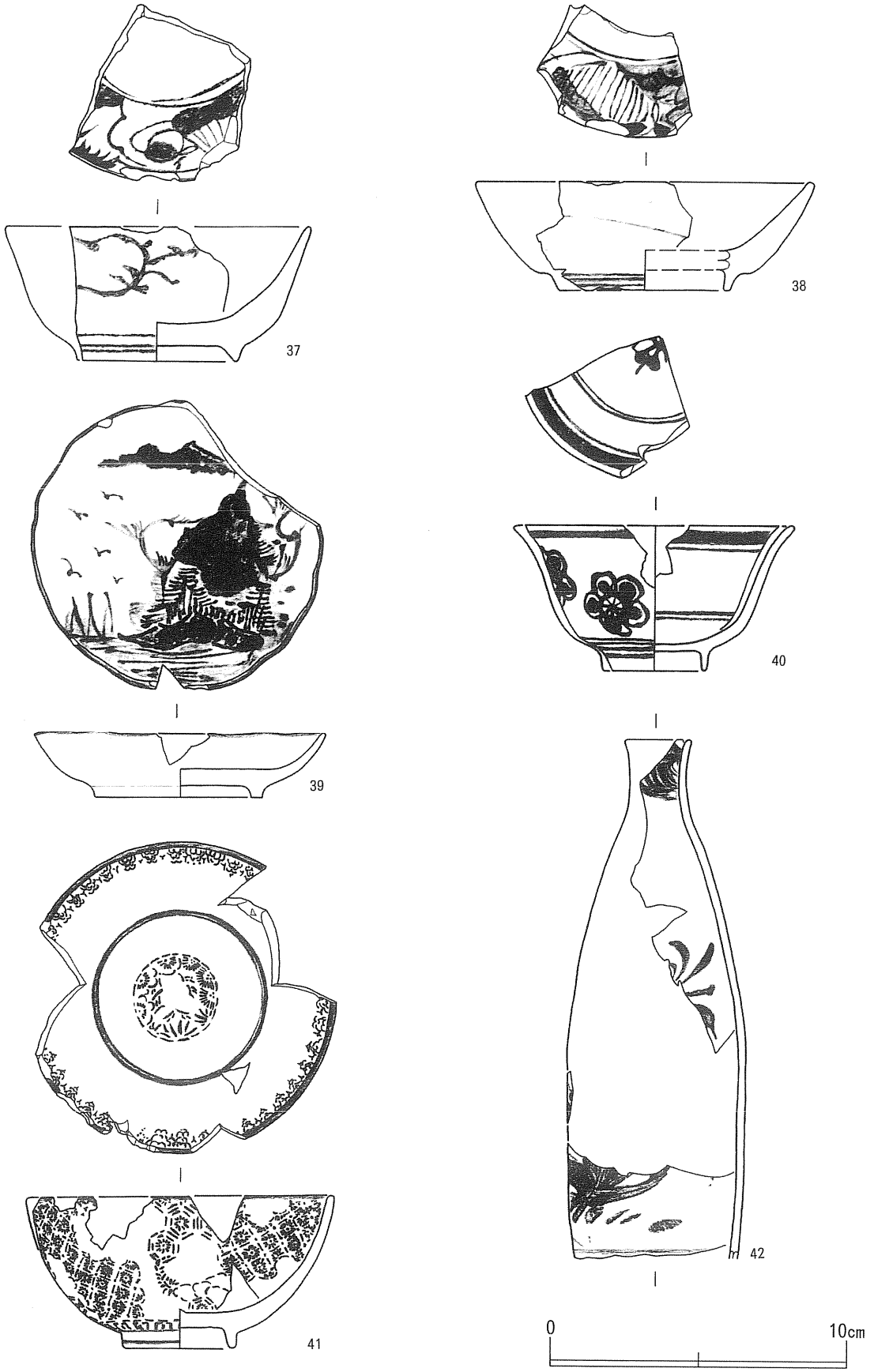
鳥羽正雄『日本城郭辞典』東京堂出版　1971(昭和46)年



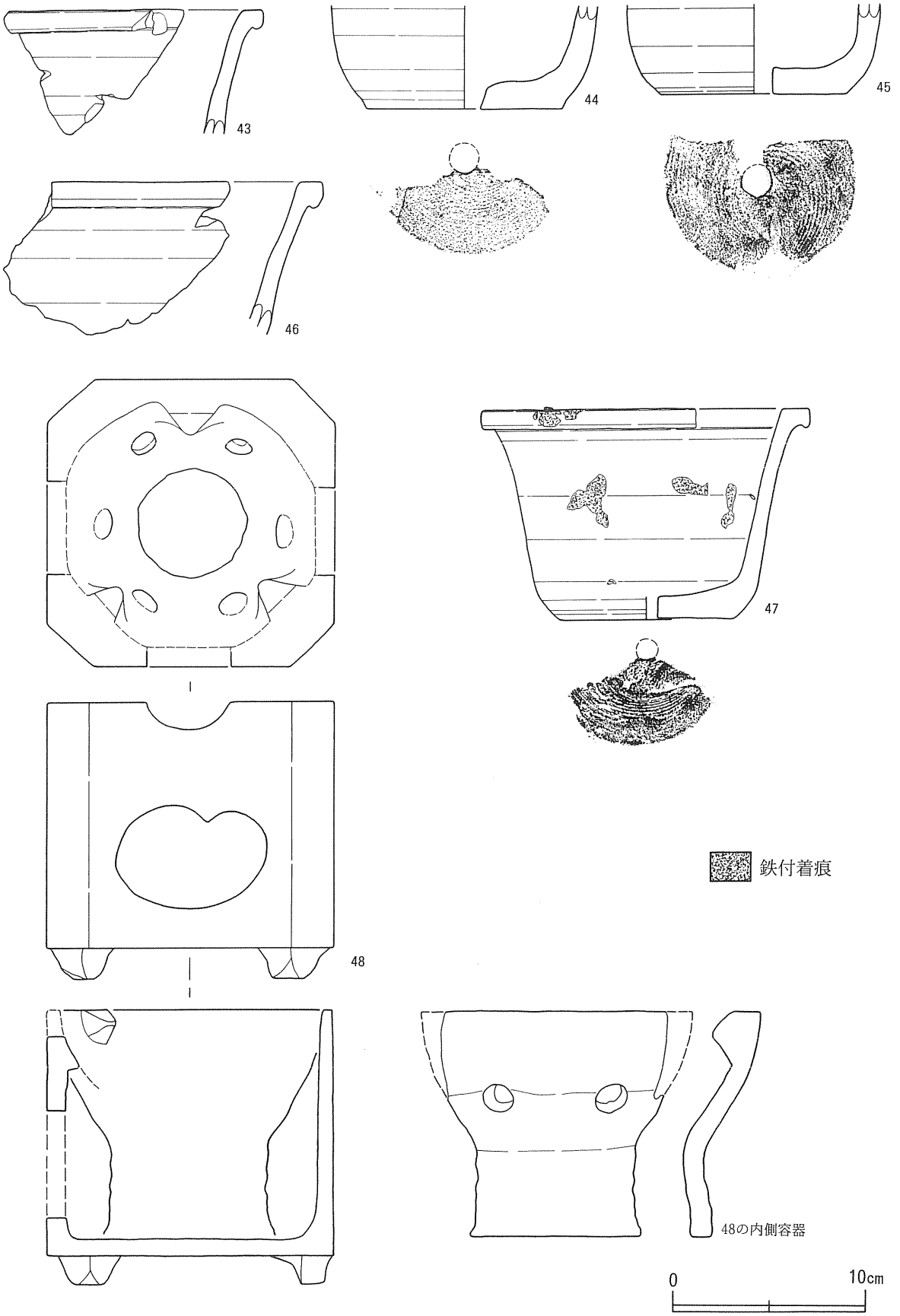
第22図　遺構外出土遺物(2)陶磁器



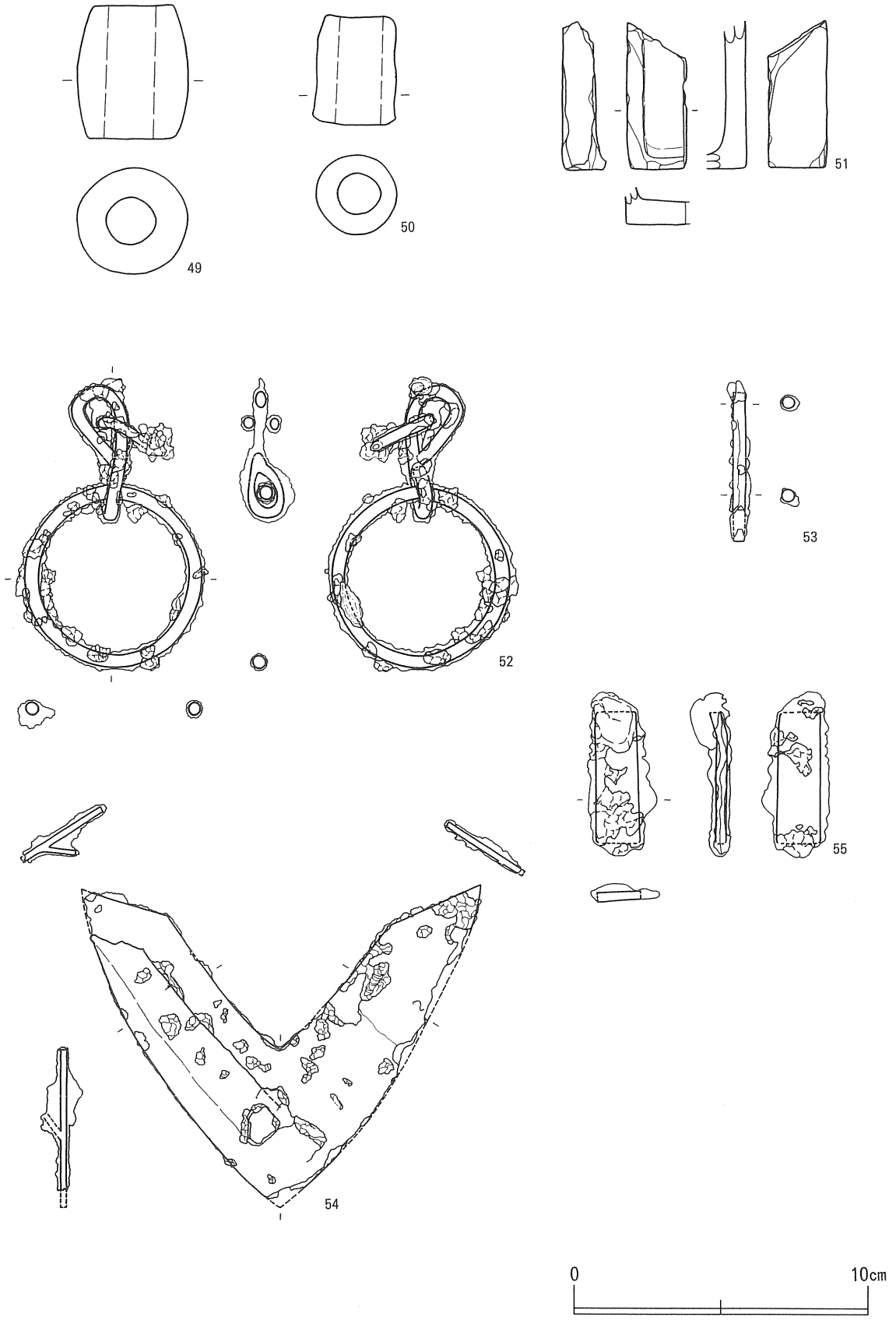
第23図　遺構外出土遺物(3)陶磁器



第24図　遺構外出土遺物(4)陶磁器



第25図　遺構外出土遺物(5)土器



第26図　遺構外出土遺物(6)陶錘・硯・鉄製品

第５章　自然科学分析

第１節　放射性年代測定

山形秀樹(パレオ・ラボ)

1　放射性炭素年代測定について

鹿来館跡から出土した炭化物試料10点の放射性炭素年代をAMS法にて測定した。試料No.9については、炭化物を含んでいなかったために測定不可であった。測定は㈱地球科学研究所に依頼した。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析器(AMS)にて測定し、yrBP年代値(AD1,950年から何年前かを示した値)を算出した。その結果は下記に示す。なお、年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用して年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料の^{14}C計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の^{14}C計数率の比が$^{14}C_{(Sample)}/^{14}C_{(Modern)} \geqq 1$の時は、Modernと表示する。

第６表　放射性炭素年代測定結果

測定No.	試料データ	^{14}C年代値	δ^{13}C	補正^{14}C年代値
Beta-138298	炭化物 No.1 SD61内 CDセクション17層	2,650 ± 50 yrBP	−30.4‰	2,560 ± 50 yrBP
Beta-138299	炭化物 No.2 SD61内 CDセクション19層	4,840 ± 60 yrBP	−26.4‰	4,820 ± 60 yrBP
Beta-138300	炭化物 No.3 SD61内 ABセクション12層	4,010 ± 60 yrBP	−27.5‰	3,970 ± 60 yrBP
Beta-138301	炭化物 No.4 SD61内 最下層	4,460 ± 60 yrBP	−26.4‰	4,440 ± 60 yrBP
Beta-138302	炭化物 No.6 SKI234内 南東側ピット	1,430 ± 50 yrBP	−29.1‰	1,360 ± 50 yrBP
Beta-138303	炭化物 No.7 SKI234内 東側溝状遺構	1,280 ± 50 yrBP	−29.2‰	1,210 ± 50 yrBP
Beta-138304	炭化物 No.8 SKI234内 東側焼土付近	1,230 ± 50 yrBP	−25.6‰	1,220 ± 40 yrBP
Beta-138306	炭化物 No.10 SX282内	230 ± 40 yrBP	−25.6‰	220 ± 40 yrBP
Beta-138389	炭化物 No.5 SKI234内 北側ピット	1,000 ± 30 yrBP	−27.0‰	970 ± 30 yrBP

2　暦年代補正について

暦年代の補正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代値(yrBP)に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±30年)を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C年代の詳細な測定値を用い、さらに、珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較により、補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。なお、交点年代値は^{14}C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、1σ年代幅は^{14}C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で1σ年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を＊＊＊またはModernと表示する。また、AD1,955＊はModernを意味する。但し、一万年以前のデータはまだ不完全であるため注意する必要がある。
暦年代補正に関しては、あくまで測定年代値の参考として記載しているものである。

第７表　補正暦年代値

測定No.	試料データ	^{14}C年代値	１σ年代幅
Beta-138298	2,560 ± 50 yrBP (BC 610年)	cal BC 785年	cal BC 800 to 770年
Beta-138299	4,820 ± 60 yrBP (BC 2,870年)	cal BC 3,640年	cal BC 3,655 to 3,625年 cal BC 3,580 to 3,530年
Beta-138300	3,790 ± 60 yrBP (BC 2,020年)	cal BC 2,475年	cal BC 2,565 to 2,515年 cal BC 2,500 to 2,445年
Beta-138301	4,440 ± 60 yrBP (BC 2,490年)	cal BC 3,090年	cal BC 3,325 to 3,225年 cal BC 3,120 to 3,005年 cal BC 2,975 to 2,935年
Beta-138302	1,360 ± 50 yrBP (AD 590年)	cal AD 665年	cal AD 645 to 685年
Beta-138303	1,210 ± 50 yrBP (AD 740年)	cal AD 795年	cal AD 765 to 885年
Beta-138304	1,220 ± 50 yrBP (AD 730年)	cal AD 785年	cal AD 720 to 745年 cal AD 760 to 880年
Beta-138306	220 ± 40 yrBP (AD 1,730年)	cal AD 1,660年	cal AD 1,650 to 1,675年 cal AD 1,775 to 1,800年 cal AD 1,940 to 1,950年
Beta-138389	970 ± 30 yrBP (AD 980年)	cal AD 1,030年	cal AD 1,020 to 1,040年

《引用文献》

Calibration Database
Editorial Comment
Stuiver,M., van der Plicht,H., 1998, Radiocarbon 40(3), p・-xiii
INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
Stuiver,M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
Nathematics
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma,A.S., Vogel,J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

第２節　鹿来館跡検出炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１　はじめに

当館跡は井川丘陵の西端の鞍部に立地する城館である。ここでは、SD61・SKI234・SB121・SX282の遺構内の堆積物中に含まれていた炭化材の樹種同定結果を報告する。同一試料の堆積物を用いてAMS法による放射性炭素年代値を測定している（別報）が、ここで報告する炭化材の樹種は、放射性炭素年代用の試料にも含まれているが、樹種同定用に追加して送られてきた試料も含まれている。なお、AMS法による放射性炭素年代値は、各遺構やその層位により変動しており鹿来館が建っていた以前や以後の堆積物も含まれていたようである。

２　炭化材樹種同定の方法

樹種同定は炭化材の３方向破断面を走査電子顕微鏡で観察し決定した。横断面（木口）は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように面を出した。この３断面の試料を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り、充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

３　結果

各試料から検出された樹種を表１に示し、同定の根拠となった材組織の観察結果を分類群順に以下

に記載する。

アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科　図版１　1a-1c(№1)

垂直・水平樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸状の肥厚が顕著であることからアカマツと同定した。

アカマツは暖帯から温帯下部に生育する常緑針葉樹で、人間活動との関係が深く二次林の主要構成樹であり、過去には現在ほど広く分布していなかった。

ヒノキ科　Cupressaceae　図版９　2a-2c(№10)

仮道管・放射組織からなる針葉樹材である。樹脂細胞の確認はできていないが、分野壁孔は１分野に1～3個あり、壁孔の輪郭は丸くヒノキ型に近いことからヒノキ科の材であることがわかる。しかし、炭化材の状況は良くないため、これ以上は分類群を絞ることができなかった。

ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版９　3a-3c(№3)

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材部では極めて小型となり分布数も減少する散孔材で、管孔の分布密度は高い。道管の壁孔は交互状であり一部では階段状も観察され、穿孔は階段数が少ない階段穿孔と単穿孔がある。放射組織は異性、１～4細胞幅のものと細胞幅が広く細胞高も高い広放射組織がある。

ブナ属は温帯極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの２種がある。

コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版２　4a-4c(№6)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、晩材部は薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版２　5a-5c(№4)

年輪の始めに中型の管孔が密接に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性のみである。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

ニレ属　*Ulmus*　ニレ科　図版10　6a-6c(№1)

年輪の始めに中型の管孔が１層配列し、その後は小型や非常に小型の管孔が多数集合して斜状・接線状に配列している環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～5細胞幅の紡錘形である。ケヤキの組織にも似ているが、結晶細胞は放射組織の上下端に配列する状態は見られず、放射組織とは離れた個所で軸方向に連なり配列しているのが観察されたことから、ニレ属と同定した。

ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒョウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがあり、いずれも落葉高木である。

エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　図版11　7a-7c(№7)

小型の管孔が単独または２～４個が放射方向に複合して分布し、晩材部では径と分布数が減少する

散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒が少ない階段穿孔。放射組織は異性、1～2細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞からなる単列部が長く伸びる。

エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木で、エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。

トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科　図版11　8a-8c(№8)

中型の管孔が１層配列し、晩材部は単独または放射方向に２個が複合した小型で厚壁の管孔が分布する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一。放射組織は同性、１～２細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約９種ある。

広葉樹　broad-leaved tree　図版11　9a(№1)

直径約4mmの細い枝で、小型の管孔が火炎状に散在し晩材に向かい徐々に径を減じている。

タケ亜科(タケ・ササ類)　Gramineae subfam. Bambusoideae　イネ科　図版11　10a(№10)

直径約7mmのやや硬質の稈である。稈の中心部は中空で、維管束は多数が同心状に均質に配列している不整中心柱である。維管束の周囲は厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が帽子状にある。このような形質からイネ科のタケとササ類を含むタケ亜科であると同定した。

タケ・ササの仲間は約12属があり、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多い。ササ類は多くは野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。

4　まとめ

今回の樹種調査からは、アカマツとヒノキ属の針葉樹2分類群、クリ・コナラ節・トネリコ属・エゴノキ属・ニレ属の落葉広葉樹5分類群、そしてタケ亜科(タケ・ササ類)が検出された。アカマツを除く分類群の樹種構成は、当地域の自然植生に対応する中間温帯林の主要構成樹種と類似していた。また、放射性炭素年代測定値が4000yrBPから4000yrBP後半の値を示したSD61内の№2～№4の試料からは、ブナ属を伴いクリが多く検出された。そして、放射性炭素年代測定値が1200yrBP～1400yrBPの値を示したSKI234からはコナラ節・トネリコ属・エゴノキ属など複数種類が検出された。このように、遺構やその堆積物の時期により、検出樹種の傾向が少し異なるようにも見受けられた。

第８表　鹿来館跡検出炭化材の樹種

試料番号	遺　　構	樹　　種	備　　考
№1	ＳＤ 61内　ＣＤセクション８層	アカマツ ニレ属 広葉樹 タケ亜科（タケ・ササ類）	アカマツ φ４㎜ φ７㎜稈
№2	ＳＤ 61内　ＣＤセクション12層	クリ	複数
№3	ＳＤ 61内　ＡＢセクション12層	ブナ属 クリ	
№4	ＳＤ 61内　　13層	クリ	
№5	ＳＩ234内　　Ｐ９	不可	
№6	ＳＩ234内　　Ｐ６	コナラ節 トネリコ属	 複数
№7	ＳＩ234内　カマド内２層	エゴノキ属	
№8	ＳＩ234内　カマド内４層	コナラ節orクリ? トネリコ属	
№9	ＳＩ121内　　Ｐ17	不可	
№10	ＳＸ282内	ヒノキ属 コナラ節orクリ?	炭化米１粒含む

第6章　まとめ

調査の結果、検出した遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱穴列、柱穴様ピット、土坑、焼土遺構、溝跡、空堀、帯曲輪であり、遺物は、石器、土師器、陶磁器、土器、鉄製品、ガラス製品、陶錘、硯が出土している。

古代の遺構であるＳＩ234竪穴住居跡は調査区Ｂ区南側の平坦面から検出されている。南東側隅にカマドを付属した3.5×3.5ｍの方形の住居跡である。古代の遺構はこの住居跡のみであるが、主郭内でなく館跡縁辺部で検出され、ＳＭ01帯曲輪・ＳＤ61空堀とは平面距離も離れるため、館跡の構築時期との関連性は薄い。

中世城館としての機能を持つと考えられるＳＭ01帯曲輪、ＳＤ61空掘は、調査区Ａ区北側に隣接して検出されている。両遺構ともに、さらに延びると考えられる遺構西側を国道７号により破壊されている。ＳＭ01帯曲輪は現状で四段の平坦面で形成される。四段の平坦面はそれぞれが上段の平坦面構築の際の廃土を利用し造られる。この帯曲輪は、防御施設としての機能ではなく城主の権力を誇示するものであった可能性もあろう。ＳＤ61空掘は等高線に対し垂直に延びる竪堀である。『秋田県の中世城館』には、「旧地形図を読めばバイパス中央部分に空堀の存在が推定される。」とあり、郭Ｉと郭Ⅱの間には空堀が存在した可能性を示唆している。調査区北部に検出したＳＤ61空堀は位置関係からこの空堀である可能性が高い。また、ＳＤ61空堀は郭Ｉに向かって延びると考えられるため、通路として機能したとすると南側に隣接して検出した１間×４間のＳＢ60は馬屋的機能を果たしていたとも推察されるが、ＳＭ01帯曲輪、ＳＤ61空堀跡ともに館跡に関連する中世の遺物が皆無であるため、遺構の構築時期、使用時期の断定は難しい。

本遺跡の出土遺物を概観すると、縄文時代の遺物は小破片で出土量も少なく、上位である西側から流入したものと考えられる。平安時代の遺物は、住居跡から出土した土師器のみである。中世の遺物は確認していない。本遺跡で最も多く認められる近世以降の遺物は、Ｂ区北側平坦面(ＬＰ50周辺)の表土層から集中して出土した陶磁器であり、出土位置の約30ｍ南東にＳＢ121掘立柱建物跡が位置することから、この遺構に関連するものと考えられる。器形は多様で、碗、皿、猪口、酒坏、徳利がある。土器では植木鉢、風炉、ガラス製品ではガラス瓶のほか、陶錘、硯、鉄製品を確認している。ＳＫ57土坑から出土したガラス瓶の体部・底部には、「日本麥酒鑛泉株式会社」「ＫＩＮＳＥＮ」「46」の銘がある。日本麦酒鉱泉株式会社は、1921(大正10)年に帝国鉱泉、加富登麦酒、日本製壜の三社合併により成立した会社である。「ユニオンビール」「三ツ矢サイダー」を生産していた。「ＫＩＮＳＥＮ」は「金線サイダー」という商品の銘である可能性が高い。金線サイダーは明治32年に金線飲料株式会社から日本初のサイダーとして発売されているが、金線飲料株式会社は、大正14年日本麦酒鉱泉株式会社に合併されており、大正14年以降は日本麦酒鉱泉株式会社から販売されている。「46」は製造ロットの可能性がある。

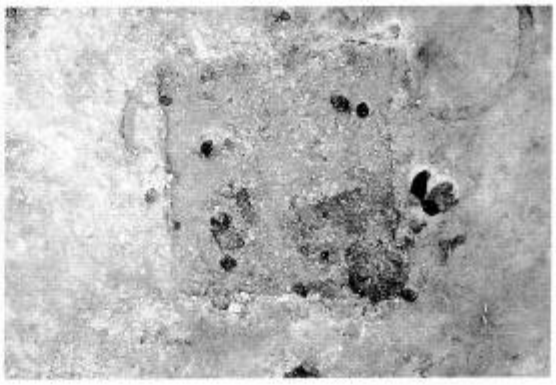
鹿来館跡は、国道７号建設事業等の後世の撹乱を受け、中世城館としての形態を一部変えてしまっているが、今回の調査により古代から近世以降にかけての鹿来館跡での人々の暮らしを考える上で貴重な資料を得たといえる。また、今回の調査は館跡の一部であり、今後、本遺跡の位置づけを明確にするためには、周辺の城館構造の解明、資料の増加が必要となる。

1　空中写真（南→北）

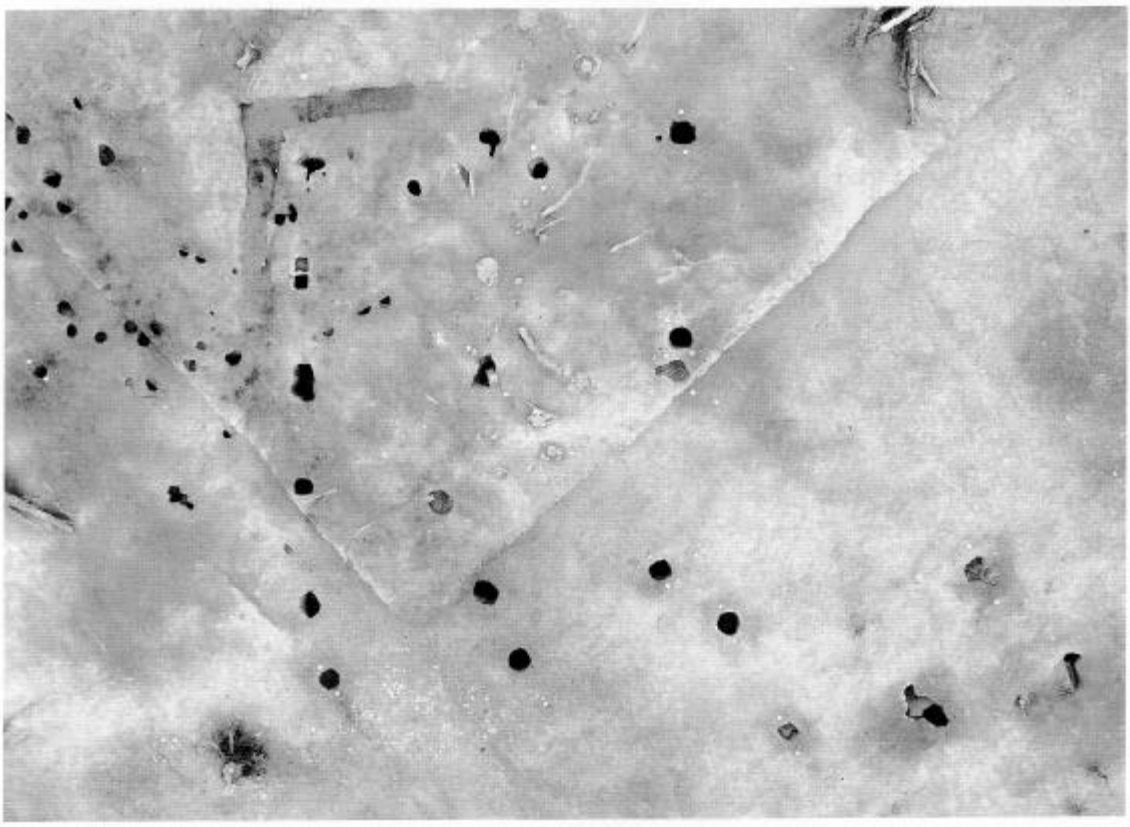
2　空中写真（西→東）

図版2

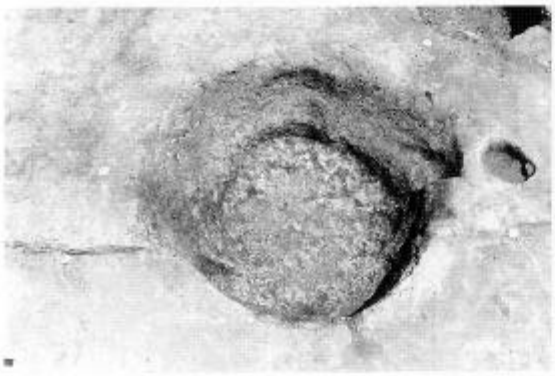
1　ＳＩ２３４確認面（西→東）



2　ＳＩ２３４（真上→）

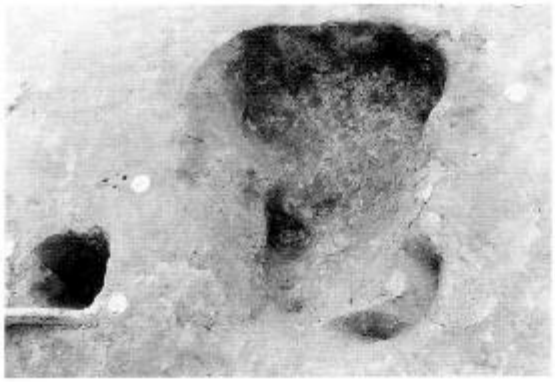


3　ＳＢ１２１（真上→）



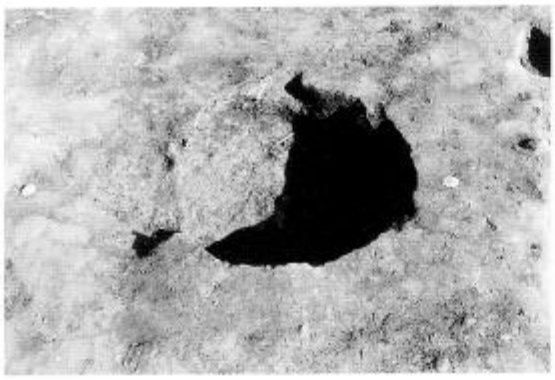
4　ＳＫＰ５６（南→北）

5　ＳＫ０９（東→西）

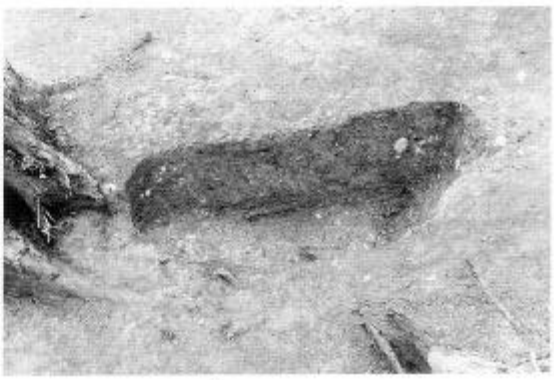


1　ＳＫ１０（東→西）

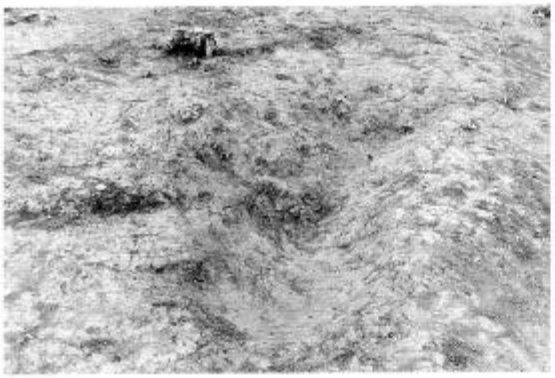
2　ＳＫ５５（北→南）



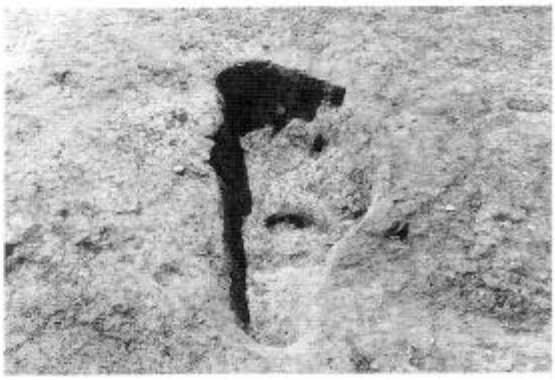
3　ＳＫ５７（北西→南東）



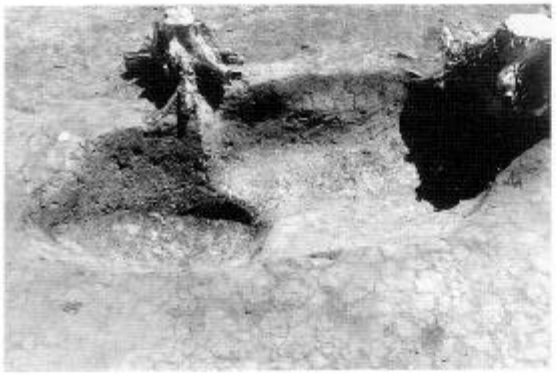
4　ＳＫ６２（北→南）



5　ＳＫ９０（東→西）



6　ＳＫ９３（東→西）

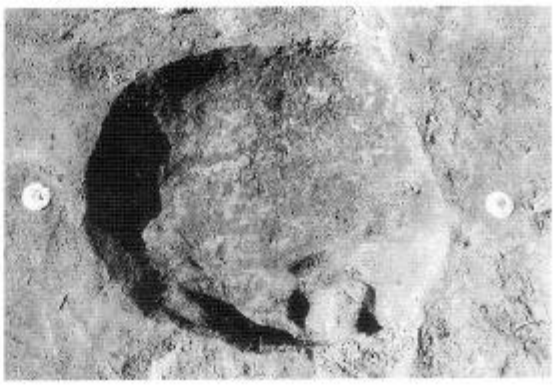


7　ＳＫ９６（西→東）

8　ＳＫ１０４（西→東）

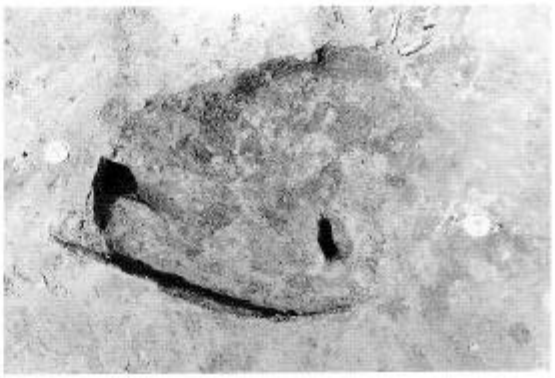
図版4

1　SK138（南→北）

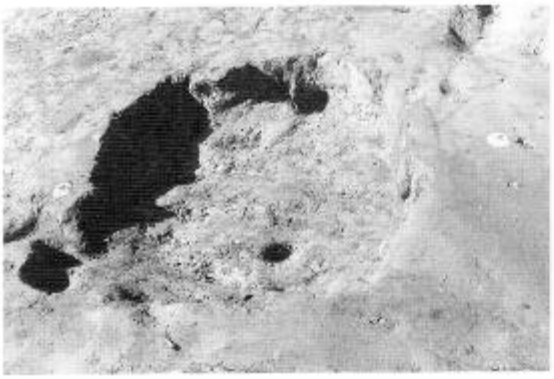


2　SK222（東→西）

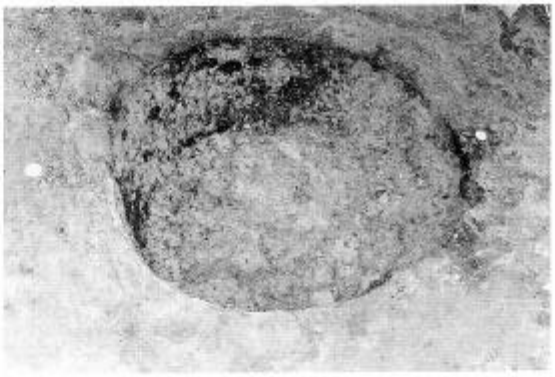
3　SK223（北→南）



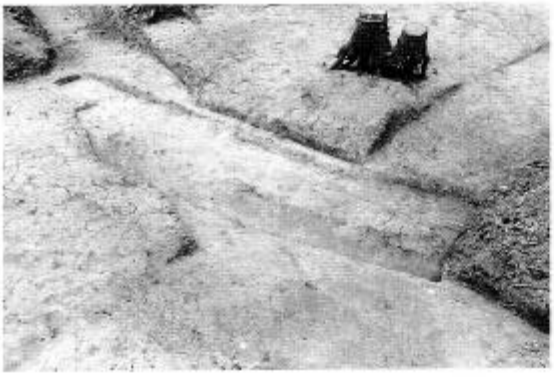
4　SK224（東→西）



5　SK290（東→西）



6　SK291（西→東）



7　SD11・12（南→北）

8　SD118（西→東）

1　SM01・SD61・SD60（東→西）

2　SD61土層（1）（東→西）

3　SD61土層（2）（西→東）

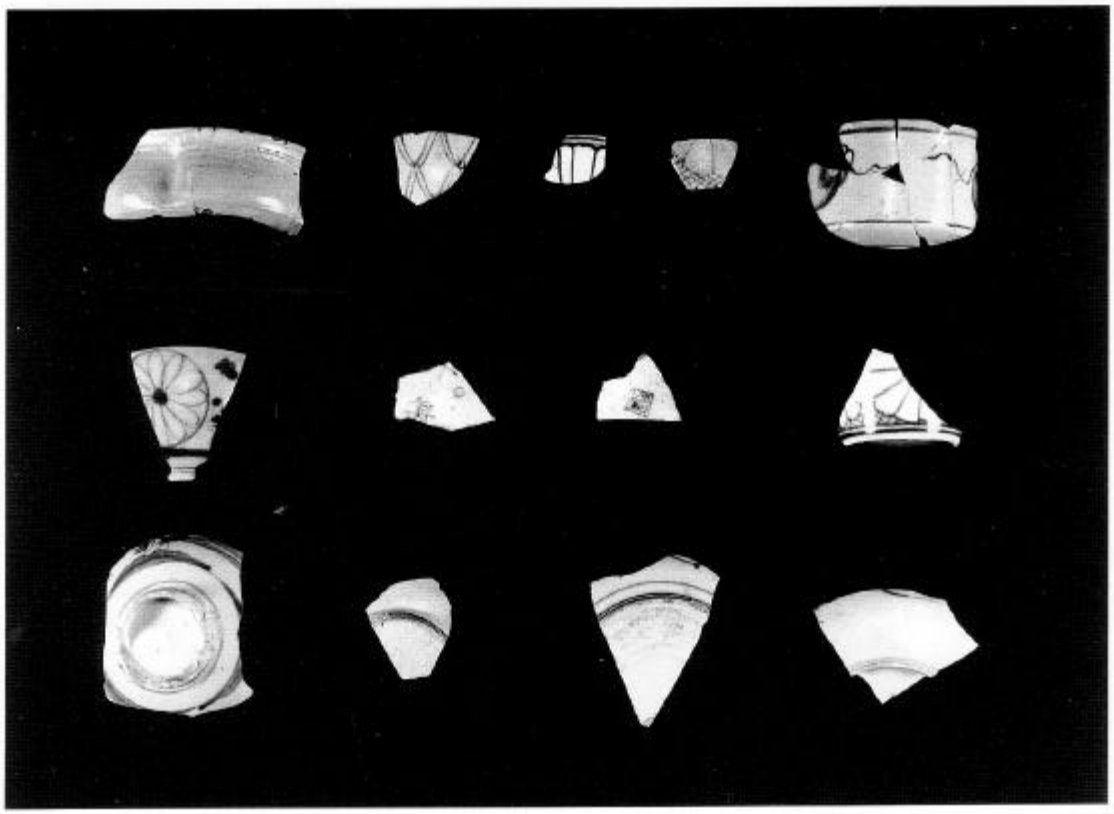
4　SD61土層（3）（西→東）

5　SD61調査風景

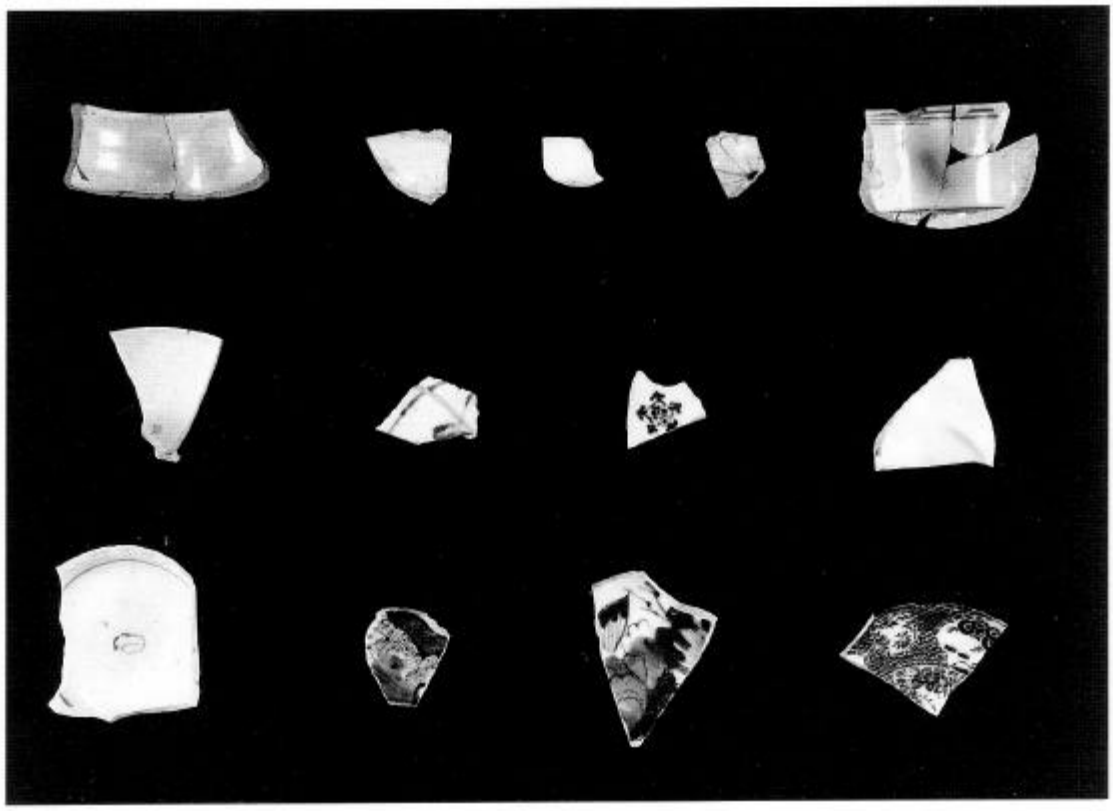
図版6

1　SM01・SD61（北→南）

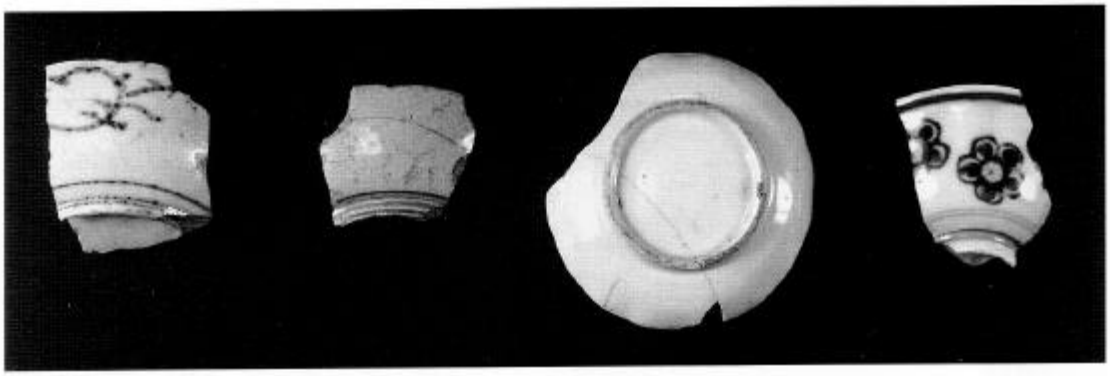
1　SM01土層（南東→北西）



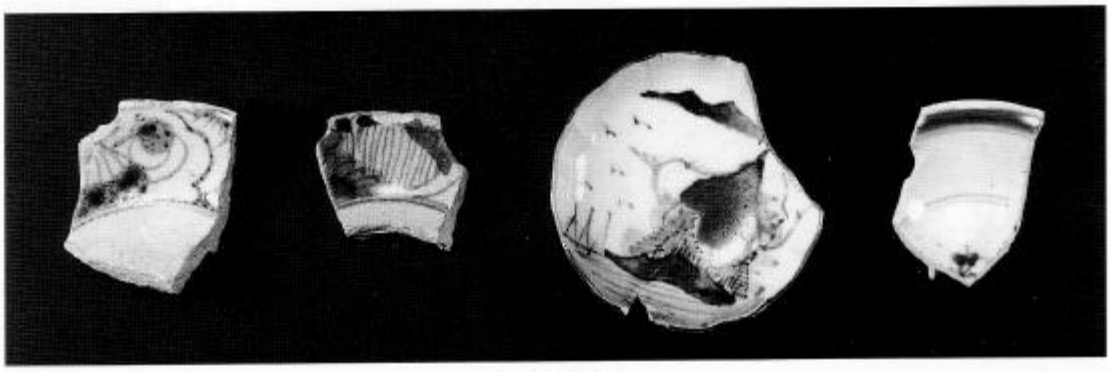
1　遺構外出土遺物（1）陶磁器



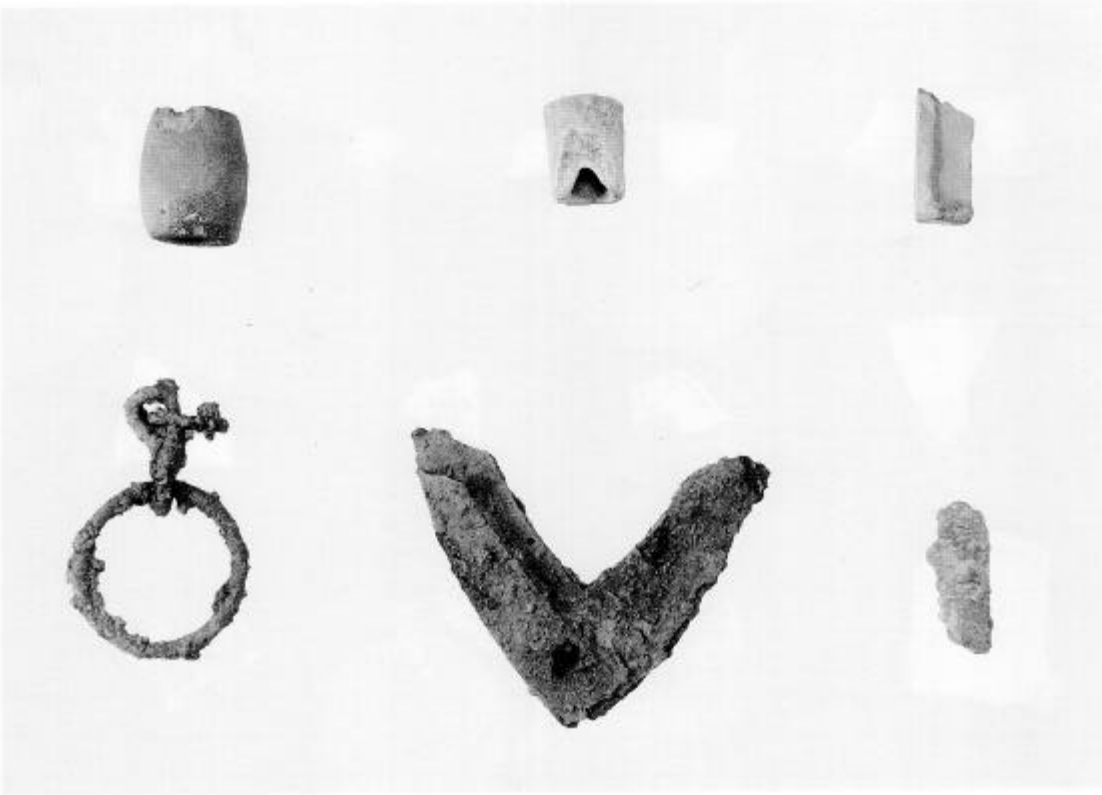
2　同　上



1　遺構外出土遺物（2）陶磁器

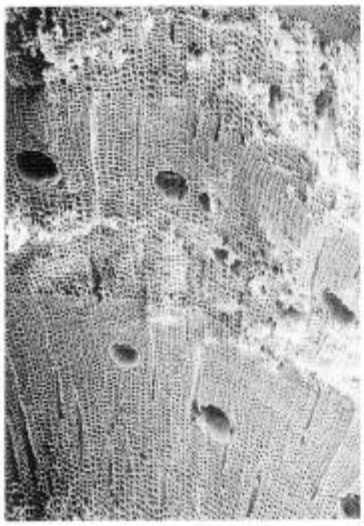


2　同　上

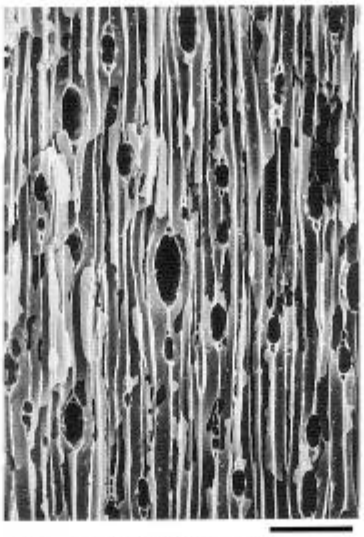


3　遺構外出土遺物（3）陶錘・硯・鉄製品

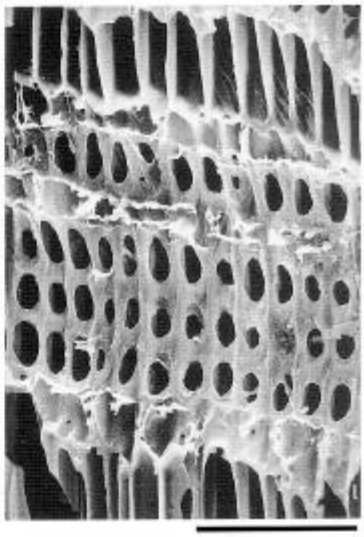
鹿来館跡・検出炭化材樹種同定（1）



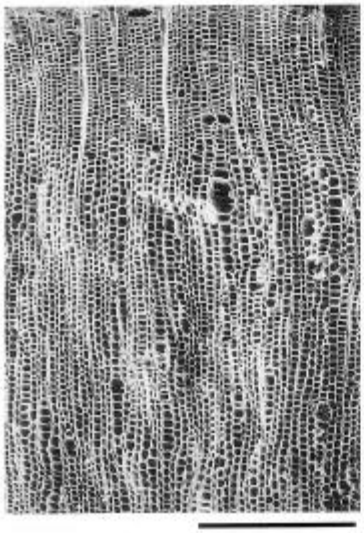
1 a　アカマツ(横断面)
No.1　bar:0.5mm



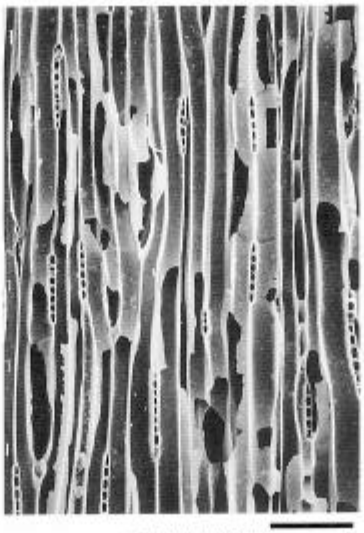
1 b　アカマツ(接線断面)
bar:0.1mm



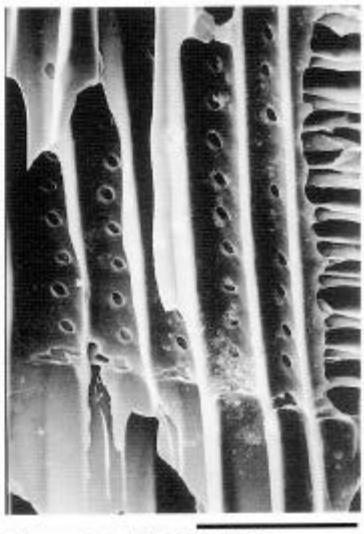
1 c　アカマツ(放射断面)
bar:0.05mm



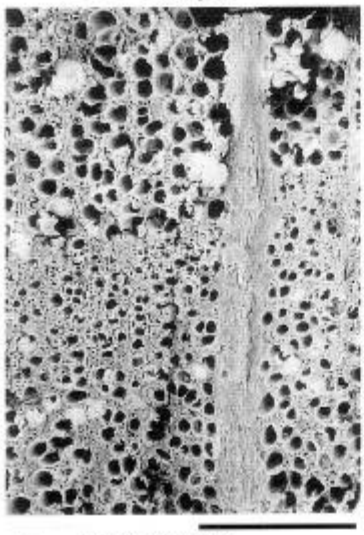
2 a　ヒノキ科(横断面)
No.10　bar:0.5mm



2 b　ヒノキ科(接線断面)
bar:0.1mm

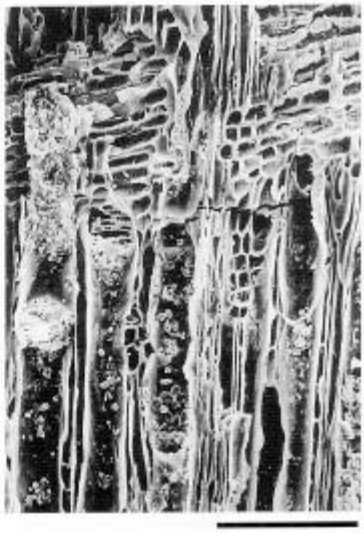


2 c　ヒノキ科(放射断面)
bar:0.05mm



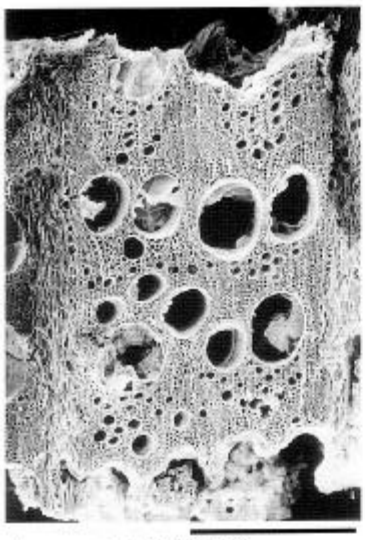
3 a　ブナ属(横断面)
No.3　bar:0.5mm

3 b　ブナ属(接線断面)
bar:0.5mm

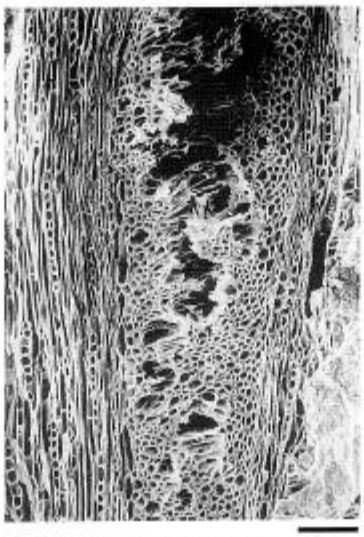


3 c　ブナ属(放射断面)
bar:0.1mm

図版10

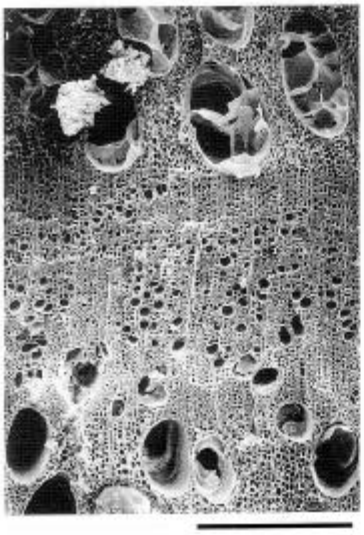


4 a　コナラ節(横断面)
No.6　bar:0.5mm



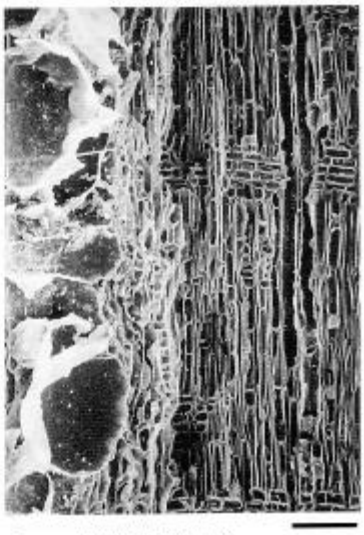
4 b　コナラ節(接線断面)
bar:0.1mm

4 c　コナラ節(放射断面)
bar:0.1mm



5 a　クリ(横断面)
No.4　bar:0.5mm

5 b　クリ(接線断面)
bar:0.1mm

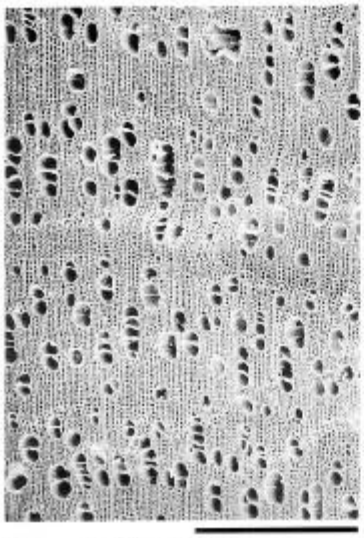


5 c　クリ(放射断面)
bar:0.1mm

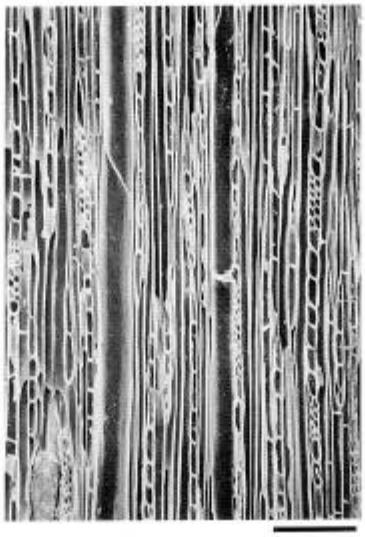
6 a　ニレ属(横断面)
No.3　bar:0.5mm

6 b　ニレ属(接線断面)
bar:0.1mm

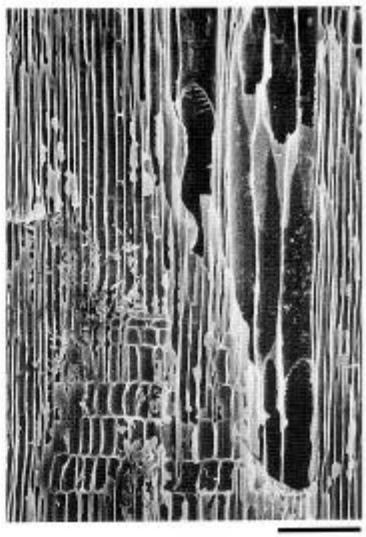
3 c　ニレ属(放射断面)
bar:0.1mm



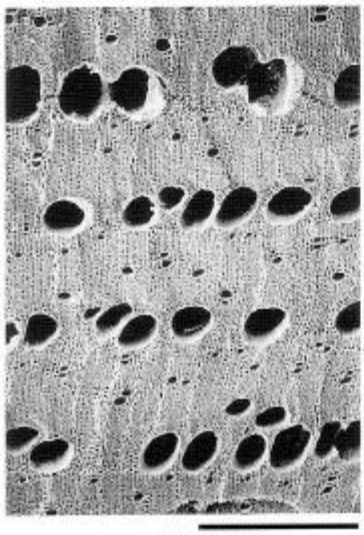
7 a　エゴノキ属(横断面)
No.7　bar:0.5mm



7 b　エゴノキ属(接線断面)
bar:0.1mm

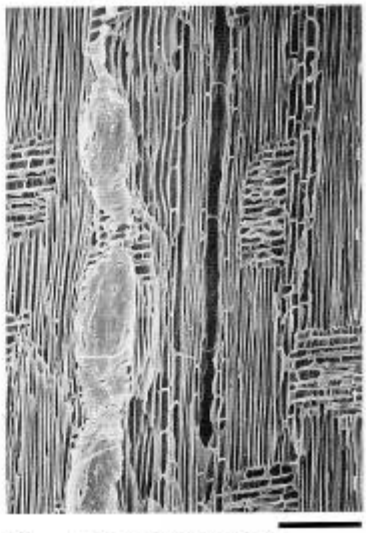


7 c　エゴノキ属(放射断面)
bar:0.1mm



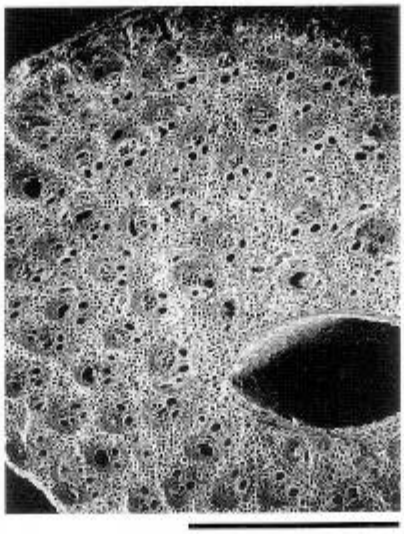
8 a　トネリコ属(横断面)
No.8　bar:0.5mm

8 b　トネリコ属(接線断面)
bar:0.1mm



8 c　ヒノキ科(放射断面)
bar:0.1mm

9 a　広葉樹(横断面)
No.1　bar:0.5mm



10 a　タケ・ササ類(接線断面)
No.1　bar:1mm

報告書抄録

ふりがな	ろくらいだてあと
書名	鹿来館跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XI
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第332集
編著作者	渡邊　慎一・播摩　芳紀
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187－69－3331
発行年月日	西暦2002年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
鹿来館跡（ろくらいだてあと）	秋田県（あきたけん） 南秋田郡（みなみあきたぐん） 飯田川町（いいたがわまち） 和田妹川（わだいもがわ） 字鹿来（あざろくらい） 20－1外			39° 53′ 6″	140° 5′ 19″	19990426 ～ 19991029	12,000	日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿来館跡	散布地 集落跡 城館跡	縄文時代 平安時代 中世 近世 近代	空掘・溝跡　6条 帯曲輪　1基 竪穴住居跡　1軒 掘立柱建物跡　2棟 柱穴列　1列 焼土遺構　2基 土坑　17基 柱穴様ピット　126基	陶磁器 土製品 鉄製品 土師器 石器	

あとがき

鹿来館跡の調査から報告書完成までの期間中、ずっと心の中にしこりのように残っていたのは、中世城館の調査の難しさである。遺構の認定から時期の確定などは、後世の地形改変や僅少な遺物などのために困難を極めた。こうした中で、調査から原稿執筆まで担当した渡邉慎一氏(現 秋田県立矢島高校教諭)と、長期間にわたり整理作業に従事された臨時職員の努力に感謝いたします。

【整理作業従事者】

相場美喜子	相原すみ子	青木美貴子	石井ひとみ	石塚　春美
井手　康子	伊藤　聡子	伊藤　里佳	井上　明子	岩谷みどり
小野寺博子	加藤　智子	鎌田　耕治	菊地奈穂美	北埜　洋子
北林　玲子	工藤　裕子	熊谷キミ子	熊谷　信子	熊地　幸子
斉藤　由希	齊藤　良子	坂本　玲子	佐々木たき子	佐々木満子
佐々木みどり	佐々木理恵	佐藤　温子	佐藤　順子	佐藤美智子
佐藤　優子	鈴木留美子	高橋　麗子	武田美奈子	千葉　恵子
内藤加代子	中田ルミ子	長谷川倫子	長谷川ミネ子	畠山恵美子
原田利恵子	正木　祐子	三浦　祥子	三澤　奈歩	三森　和人
宮田美奈子	八島　知江	矢野真由美	楊　国萍	渡辺イミ子
渡辺　浩一				

秋田県文化財調査報告書第332集

鹿来館跡

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書XI－

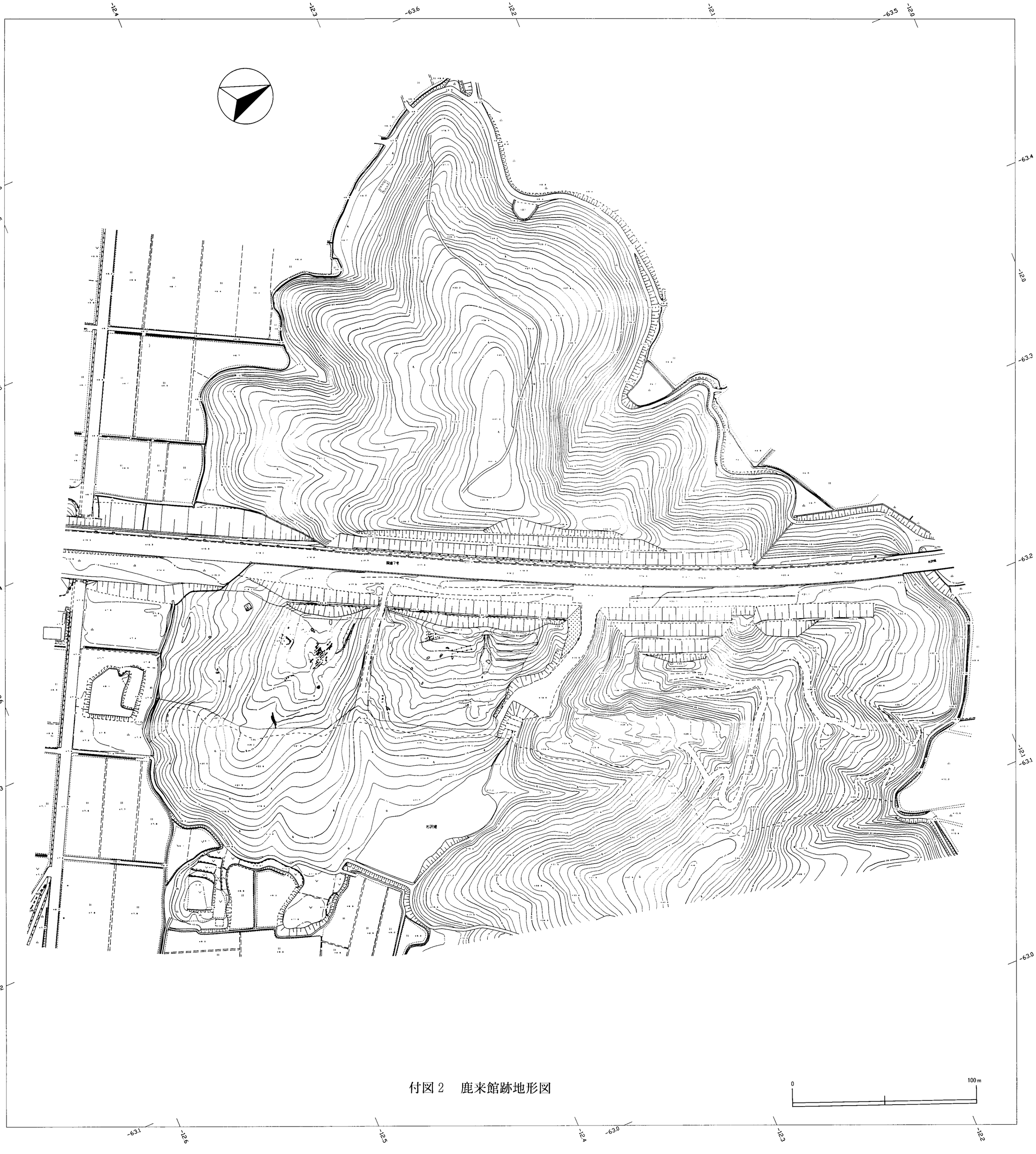
印刷・発行　平成14年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話 0187(69)3331　ＦＡＸ 0187(69)3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王３丁目１番１号
電話 018(860)5193　ＦＡＸ 018(860)5886

印　　刷　株式会社　仙北印刷所

付図１　鹿来館跡遺構配置図


-12.4
-12.3
-63.6
-12.2
-12.1
-63.5
-12.0
-63.4
-12.0
-63.3
-63.2
-12.1
-63.1
-63.0
-63.6
-12.5
-63.5
-63.4
-12.6
-63.3
-63.2
-63.1
-12.6
-12.5
-12.4
-63.0
-12.3
-12.2
0
100m

付図２　鹿来館跡地形図